

目録

| | | |
|--------|--------------------------------------|----|
| 1. | はじめに..... | 3 |
| 2. | 先行研究..... | 4 |
| 2.1. | 二字漢語アクセントの現況..... | 4 |
| 2.2. | 中国人日本語学習者における日本語アクセント母語干渉に関する研究..... | 5 |
| 3. | 研究目的..... | 6 |
| 4. | 予備調査..... | 6 |
| 4.1 | 調査対象 | 6 |
| 4.2 | 調査内容 | 6 |
| 4.2.1. | 日本語学習歴調査 | 7 |
| 4.2.2. | 単語アクセントの産出状況の予想..... | 7 |
| 4.2.3. | 調査用単語 | 7 |
| 4.3. | 調査方法 | 9 |
| 4.4. | 倫理的配慮 | 9 |
| 4.5. | 調査結果と分析 | 9 |
| 4.5.1. | アクセント型による分析..... | 11 |
| 4.5.2. | 中国語四声による分析..... | 11 |
| 5. | 本調査..... | 11 |
| 5.1. | 実施時間 | 11 |
| 5.2. | 調査対象者： | 12 |
| 5.3. | 調査内容 | 12 |
| 5.3.1. | 事前アンケート調査..... | 12 |
| 5.3.2. | 日中同形の二字漢語アクセント発音状況調査..... | 12 |
| 5.3.3. | フォローアップインタビュー..... | 12 |
| 5.4. | 調査方法 | 12 |
| 6. | 調査結果と分析..... | 13 |
| 6.1. | 正答率が高い単語 | 13 |
| 6.1.1. | 「推測」（平板型） | 15 |

| | | | |
|---------|----------|-----------|----|
| 6.1.2. | 「隔日」 | (平板型) | 16 |
| 6.1.3. | 「水滴」 | (平板型) | 17 |
| 6.1.4. | 「確実」 | (平板型) | 18 |
| 6.1.5. | 「一目」 | (平板型・中高型) | 19 |
| 6.1.6. | 「学術」 | (平板型・中高型) | 21 |
| 6.1.7. | 「食欲」 | (平板型・中高型) | 22 |
| 6.1.8. | 「極楽」 | (平板型) | 23 |
| 6.1.9. | 「肉体」 | (平板型) | 24 |
| 6.1.10. | 「国立」 | (平板型) | 25 |
| 6.1.11. | 「的確」 | (平板型) | 26 |
| 6.1.12. | 「哲学」 | (平板型・頭高型) | 27 |
| 6.2. | 正答率が低い単語 | | 28 |
| 6.2.1. | 「催促」 | (頭高型) | 31 |
| 6.2.2. | 「体力」 | (頭高型) | 33 |
| 6.2.3. | 「歳月」 | (頭高型) | 34 |
| 6.2.4. | 「快樂」 | (頭高型) | 35 |
| 6.2.5. | 「背景」 | (平板型) | 37 |
| 6.2.6. | 「退会」 | (平板型) | 38 |
| 6.2.7. | 「体格」 | (平板型) | 39 |
| 6.2.8. | 「墜落」 | (平板型) | 40 |
| 6.2.9. | 「圧力」 | (中高型) | 41 |
| 6.2.10. | 「色彩」 | (平板型) | 43 |
| 6.2.11. | 「内閣」 | (頭高型) | 44 |
| 6.2.12. | 「室内」 | (中高型) | 45 |
| 6.2.13. | 「独裁」 | (平板型) | 47 |
| 7. | まとめ | | 49 |
| 8. | 今後の課題 | | 50 |
| | <参考文献> | | 51 |
| | <参考辞書> | | 52 |

中国国内の日本語学習者におけるアクセントの産出

—日中同形の二字漢語を中心に—

1. はじめに

日本語と中国語は、両方とも高低アクセントに属する言語である。『言語の事典』では「日本語のアクセントは単語高さアクセントで、アクセントが単語ごとに決まっているため、分布に関する制約が厳しいために、理論的に可能な組み合わせの型の一部しか実在せず、音節アクセントの逆になる」と述べている。

それに対して、『言語学大辞典』では、「中国語のアクセント（いわゆる声調）は、日本語のアクセントと同じく語の意味を区別するのに役立つという機能がある。しかし、中国語の声調は個々の音節について定まるというので、この点で日本語のアクセントとは区別される。たとえば、東京方言の場合、「高から低へ移るモーラ（すなわちアクセント核）の位置」が弁別的であって、その他の個々のモーラが高か低かということはその単語内のアクセント核の位置によって自動的に決定される。中国語にはこのようなことがない」と説明している。

日本語アクセントと中国語声調にはこのような特徴があるため、中国語母語話者の日本語アクセントに問題が生じるのは不思議ではないと考えられる。

また、日本語と中国語には同形の二字漢語が多く存在している。そのため、中国語母語話者は日本語を学習するとき、母語からの影響を受けやすいと思われる。特に、日中同形の二字漢語を学習し始めるとき、母語のアクセントの影響で、日本語のアクセントを安易に推測してしまう可能性がかなり高いと考えられる。あるいは、正確な日本語のアクセントを知っていても、実際に発話するとき、母語のアクセントから影響を受けて、正しく発音できないこともあると考えられる。

近年、中国国内での日本語音声教育はますます重視されてきている。劉（2017）によると、現在外国人日本語学習者に対するアクセント教育は着実に進んでいるようである。またアクセント教育関係の指導・学習用資料も充実しつつある。しかし、音声教育の現状では、発音指導に力を入れてはいるものの、文法教育などと比べれば、まだ多くの問題点があると思われる。とくに中国国内の日本語学習者（以下、学習者）の場合、アク

セントの自然習得ができないうえに、母語から様々な影響を受けやすく、それらが発音の運用に対して妨げになっていることが多く指摘されている（陶 2017）。

本研究では、学習者の日本語アクセントについての知識、アクセントの産出と母語干渉の相互関連性を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1. 二字漢語アクセントの現況

塩田（2016）では、漢語のアクセントはその語の音韻構造の違いによって、ある程度の傾向が見られると述べており、二字漢語のアクセントの現況は、以下のように示している。

- ① 1拍+1拍：全体として頭高型を指向しており、またその傾向を強めつつある。

例 趣味、図書、馬車、維持、許可

- ② 2拍+1拍：全体として頭高型を指向しているが、アクセントの変化が進行中の語には頭高型に向かうものと平板に向かうものがあり、総体として把握が困難である。

例 名詞的意味の場合には、頭高型が多い：国土、数値、博士、勝負

動詞的意味の場合には、平板型が多い：飲酒、開始、消化

- ③ 1拍+2拍：全体として平板型を指向しているが、アクセントの変化が新呼応中の語には頭高型に向かうものと平板型に向かうものがあり、総体としての把握が困難である。

例 平板型：希望、珠算、治療、自殺、離婚

頭高型：意見、苦勞

- ④ 2拍+2拍：全体として平板型を指向しているが、アクセントの変化が進行中の語には頭高型に向かうものと平板型に向かうものがある。ただし若年層では平板型の支持率が高い語群があり、総体としてはゆるやかに平板化しつつある。

例 平板型：愛犬、学習、背景、全員

頭高型：解釈、学問、審判

また、坂本（1999）では、1998年の『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』に記載されている漢語を取り上げて、下記のように述べている。

①二字漢語（2拍）総計 1,065 型、このうち頭高型（875 型）が最も多い。

②二字漢語（3拍）総計 9,038 型、平板型（4,623 型）と頭高型（4,063 型）が同程度に多い。

③二字漢語（4拍）総計 13,899 型、このうち平板型（11,735 型）が最も多い。

2.2. 中国人日本語学習者における日本語アクセント母語干渉に関する研究

中国語母語話者には、声調の影響による日本語のアクセントへの負の転移があること、そして一定の傾向が認められることも確かである（劉 2017）。

アクセントの習得について、劉（2017）では、アクセントの習得が「自力ではなかなか知り得ない学習ポイント」であり、学習者が教師側の指導（ネイティブの指摘）なしに、間違いに気づくことが難しいポイントであるとしている。筆者自身の場合でも、初めて日本語を学習したとき、指導教師が全員ノンネイティブであったため、アクセントの学習がなかなかうまく行けなかった。ネイティブ教師の手助けが得られないことは、学習者には避けられない問題である。

また、中国人の日本語学習者による日本語アクセントの生成について、中国語の声調分布の比率や日本語の重音節の有無などが関与することが報告されているが、語種を分けて漢語のみを考察した研究はほとんど見られない。李（2015）の研究では、中国人の日本語学習者は学習歴が長くなっても、日本語漢語のアクセントを習得しにくいこと、また音節数が一致すると母語からの音韻転移もより起こりやすいことなどが明らかにしている。しかし、中国語の声調と日本語漢語のアクセントの間で音韻転移がおこるかどうかについてまだ十分な研究がなされていない。

そして、劉（2017）では、「①中国語の第4声は、頭高型のように、一拍目の後に音調の急激な声の高さ（ピッチ）の変化—下がり目—を伴い、その影響を受けて頭高型で発音してしまう可能性が高い、②中国語で第2声で発音される語に関しても頭高型で発音されやすい、③中国語で第1声と第3声の漢語の場合、日本語の一拍目を低く発音する傾向がある」ことを指摘している。また、楊（1993）は中国語の声調の組み合わせで

は、2音節で「前平後降」のパターンが一番多いので、学習者が急降下するように発音しやすいとも述べている。さらに、朱（1993）では、「中国語には、高く平らな音節（第1声）の連続する言葉も、また低い音節（第3声）の連続する言葉も少ない。とくに低いことが特徴である第3声の音節は、2つだけ続く場合でも「変調」の規則が働き、最初の第3声を第2声にしてしまう。したがって、中国人が日本語を話す場合、高い拍と低い拍が3つ以上連続したものは苦手で、それを上がり下がりの波が頻繁にでるようなものにしがたがる」と指摘している。

3. 研究目的

本研究は、学習者がすでに学習した日本語語彙の語種を分けて、特殊拍を含んでいるものを除外し、日中同形の四拍二字漢語のみのアクセントの産出状況を考察し、中国語の声調と日本語漢語アクセントとの間で音韻転移が起こるかどうかについて、明らかにすることを目的とする。また、学習者がこのアクセントを生成するとき、どのような特徴があるのか、なぜそれぞれの特徴を持っているのかを詳しく分析することが必要である。

まず、学習者の日本語アクセントの習得状況を明らかにし、二字漢語アクセントの産出について音声調査を行う。つぎに、母語の影響を受けて、学習者は二字漢語についてどのように発音するか、その傾向の有無を解明したいと思う。そして、アクセントの母語干渉について、学習者、または教育関係者にいくつかの解明策を示すことに努める。

4. 予備調査

4.1. 調査対象

予備調査の対象者は中国北京市（あるいは周辺地域内の大学）に在学中の日本語専攻の学部生10名である。

4.2. 調査内容

調査は文字と音声を用いて行うもので、以下の項目から構成される。

4.2.1. 日本語学習歴調査

学習歴調査では、調査対象者現在までの日本語学習歴についての調査である。日本語学習時間、出身地などについて調査対象者を分類する。同時に調査語とする予定の単語について、学習者の既知度を調べた。

4.2.2. 単語アクセントの産出状況の予想

先行研究によると、学習者は日中同形の二字漢語を発音するとき、①中国語で第4声が含まれている単語を「頭高型」で発音してしまう可能性が高い、②第1声と第3声が含まれている単語は「平板型・尾高型」「中高型」で発音しやすい、③第2声も「頭高型」で発音する傾向があると予測できる。

4.2.3. 調査用単語

単語アクセントの産出状況予想から、調査用単語は、以下のように分類する。

イ. 第4声が含まれている単語（特に頭文字が第4声）→頭高型で発音しやすい

ロ. 第4声は含まれていないが、第2声が含まれている単語→頭高型発音しやすい

ハ. イ、ロ以外の単語（第1声、第3声のみ）→頭高型で発音しにくい

調査で使う単語は、中国国内で使用されているテキストに含まれている漢語を調査単語とする。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて、出現頻度を調査して、その結果に基づき、学習者にとって既知度がやや低い日中同形の二字漢語の単語を抽出する。さらに、可能な限り特殊拍によるアクセント上の影響を回避するため、特殊拍を含んでいる単語を除外する。

また、中国語では漢字一文字ずつをほぼ均一的な長さで発音する。日本語でこれにもっとも類似しているのは2拍と4拍の二字漢語である。さらに4種類のアクセント型をすべて含めるため、4拍の二字漢語に限定する。

そして、調査用単語の既知度について、学習者に日本語で書かれた各二字漢語に、5段階（よく使う・ときどき使う・知っているけどあまり使わない・知っているけど使わない・知らない）で、評定してもらう必要もある。

整理すると、表1の単語を調査単語とする。

表 1 予備調査用単語

| 声調 | アクセント | 単語 |
|-----------------------------|--------------|--|
| イ.第4声が含まれている単語 | 平板型 (尾高型) | <u>一旦</u> 、一律、概説、開拓、開会、隔日、確実、 <u>学術</u> 、学説、獲得、確立、 <u>活力</u> 、虐待、告白、克服、国立、極楽、再開、再会、再発、 <u>在来</u> 、在学、色彩、実物、 <u>食欲</u> 、推測、垂直、水力、切実、接続、設立、束縛、退会、退学、対立、大概、 <u>対決</u> 、体質、蓄積、着色、着陸、墜落、的確、 <u>哲学</u> 、独立、内陸、肉体、敗北、倍率、迫害、薄弱、莫大、爆発、発育、背景、決裂、没落、略奪、木材、浴室、翌日、落第、外来 |
| | 頭高型 | 解釈、快樂、歲月、催促、 <u>在来</u> 、体育、体力、 <u>対決</u> 、内閣 |
| | 中高型 | 圧力、 <u>一旦</u> 、屋外、 <u>学術</u> 、 <u>活力</u> 、在来、室内、 <u>食欲</u> 、 <u>哲学</u> 、蜜蜂、血液 |
| ロ.第4声は含まれていないが、第2声が含まれている単語 | 平板型 (尾高型) | 海水、海賊、海拔、採掘、裁決、採血、出題、随筆、体格、独裁、改革、垂直、排水 |
| | 頭高型 | なし |
| | 中高型 | なし |
| ハ、イ、ロ以外の単語（第1声・第3声のみ） | 平板型 (尾高型) | 血圧、水滴 |
| | 頭高型 | なし |
| | 中高型 | なし |

注：下線のものはアクセントのゆれがある単語

中国語では、第4声をもっとも頻繁に使われるので、イの単語数が最も多くなる。つまり、学習者は二字漢語を発音するとき、頭高型で発音しやすいと考えられる。そのため、予備調査はアクセント型別で考察した。調査対象者の負担にならないように、以下の15語を抽出して発音してもらう。

ニ. 平板型組：推測、隔日、独裁、水滴、隔日

ホ. 頭高型組：催促、体力、歲月、快樂、内閣

へ、中高型組：一目、学術、圧力、室内、食欲

4.3. 調査方法

まず、調査用単語の既知度を調査する。調査用単語を東京出身の日本語母語話者 2 名に発音してもらい、録音し、データとして保存する。

次に、遠距離通話ソフトウェア『WECHAT』を使用し、中国北京周辺の大学に在学中の日本語専攻の学部生に発音させ、録音し調査を行う。録音の際にまず調査対象者が記入した調査票を回収し、アクセント表記が書かれていない単語リストを使い、すべての単語を 2 回ずつ読み上げてもらい、録音する。

分析方法については、録音した音声をまず筆者がアクセント型を判定し、さらに日本語教師 3 名（東京出身）による再判定を行う。

4.4. 倫理的配慮

予備調査では、調査対象者の承諾を得たうえで調査を実施する。筆者は研究目的、調査方法、内容および自由意思により参加できること、途中辞退が可能であること、辞退しても不利益は生じないこと、匿名性の確保、研究終了後のデータの破棄について等を調査対象者に説明して同意を得たあと、研究を進める。

4.5. 調査結果と分析

学習者の発音状況は表 2 のとおりである。

表 2 予備調査の参加者の発音状況

| | S1 | S2 | S3 | S4 | S5 | S6 | S7 | S8 | S9 | S10 |
|---------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1. 推測 (第 1 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 |
| 2. 隔日 (第 2 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 |
| 3. 独裁 (第 2 声 + 第 2 声) | 中③ | 平 | 平 | 中③ | 中③ | 中② | 平 | 平 | 平 | 中② |
| 4. 水滴 (第 3 声 + 第 1 声) | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 |
| 5. 確実 (第 4 声 + 第 2 声) | 平 | 平 | 中② | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 |
| 6. 催促 (第 1 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 頭 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 頭 | 頭 |
| 7. 体力 (第 3 声 + 第 4 声) | 平 | 頭 | 平 | 平 | 頭 | 平 | 平 | 頭 | 頭 | 頭 |
| 8. 歲月 (第 4 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 中② | 平 | 平 | 頭 | 平 | 頭 | 平 | 頭 |
| 9. 快樂 (第 4 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 |
| 10. 内閣 (第 4 声 + 第 2 声) | 平 | 中② | 平 | 平 | 頭 | 平 | 平 | 平 | 頭 | 頭 |
| 11. 一目 (第 1 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 中② | 平 | 中③ | 中② | 平 | 平 | 中② | 平 |
| 12. 學術 (第 2 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 中③ | 中③ | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 中② |
| 13. 圧力 (第 1 声 + 第 4 声) | 平 | 中② | 中③ | 中③ | 中③ | 中② | 平 | 平 | 中② | 中② |
| 14. 室内 (第 4 声 + 第 4 声) | 中③ | 中② | 中② | 中② | 中③ | 中② | 中② | 平 | 中② | 中② |
| 15. 食欲 (第 2 声 + 第 4 声) | 平 | 平 | 平 | 中② | 平 | 中② | 平 | 平 | 平 | 中② |

(注：SはStudent。平＝平板型（尾高型）、頭＝頭高型、中＝中高型。②、③はアクセント核の位置である。)

予備調査の結果によると、学習者はアクセントの産出について、以下の特徴が見られる。

4.5.1. アクセント型による分析

平板型の出現率が高い。特に推測、隔日、水滴、快樂では、10名の学習者が全員平板型で発音した。これらは中国語四声で発音されるべき単語であるが、母語の影響を受け、起伏式で発音する傾向はほとんど見られない。

頭高型では、催促、体力、歳月、内閣の4語のみ出現した。中国語の第4声との関連性があるかもしれないが、4語ともに[a]+[i]のところで著しく下がり目が出現した（「催（さい）」「体（たい）」「歳（さい）」「内（ない）」）。

中高型も同様である。独裁、室内の2語の下がり目は「裁（さい）」と「内（ない）」に集中する傾向が見られる。

4.5.2. 中国語四声による分析

先行研究により、第4声で発音される二字漢語は、頭高型で発音されやすいことが分かっているが、実際には平板型が多く、先行研究の推論とは一致していなかった。

また、第2声で発音される二字漢語は中高型で発音されやすい。予備調査の結果からみると、確実に第2声のところで下がり目が出やすいが、この点は先行研究の推論と一致していると考えられる。

第1声と第3声では、「水滴」しか調査語がなく、全員が平板型で発音したので、関連性があるかどうかはまだ断言できない。

5. 本調査

5.1. 実施時間

2018年9月6日～2018年9月30日、計25日。

5.2. 調査対象者

北京市内の大学3校で在学中、且つ北京市（あるいは周辺地域）出身の日本語学部2年39人、3年43人、4年生32人、合計114人。

5.3. 調査内容

5.3.1. 事前アンケート調査

事前アンケート調査は、予備調査の内容と同じく、調査対象者の出身地や日本語学習歴などについてアンケート調査である。

5.3.2. 日中同形の二字漢語アクセント発音状況調査

発音状況調査の形式は予備調査と同様であるが、調査用単語の数を増やした、予備調査の15語から25語に増やし、より客観的に学習者の発音状況が反映できるようにした。

また、予備調査の結果を踏まえ、選出された調査用単語は、予備調査のように各パターンのアクセントを平均的に分布させるのではなく、ランダムに抽出されたものとした。

5.3.3. フォローアップインタビュー

学習者の日本語音声の学習状況や心理状態などをより詳細に把握できると考えて、予備調査時の口頭インタビューから半構造化インタビューに変更した。また、単語の既知度とアクセントの生成にはどのような関連性があるのかを明らかにし、フォローアップインタビューを行う必要があると考えている。

5.4. 調査方法

予備調査と同じく、筆者がマンツーマン形式で調査を行う。まず、調査対象者の出身や日本語学習歴などの基本情報をアンケート調査の形で収集する。そして、ボイスレコーダを用いて、学習者の音声データを収集する。最後にフォローアップインタビューを実施し、学習者の既知度や学習情報などを調査する。

本調査を実施した後、現在東京の日本語学校に勤務している日本語教師2名（合計3名）で録音データを整理し、調査結果表を完成させる。

6. 調査結果と分析

学習者の正答率によって以下のように調査結果をまとめた。

6.1. 正答率が高い単語

正答率が70%以上の単語を「正答率が高い」に分類した。このグループの単語には以下のような特徴がある。

- ①主に平板型に属する
- ②中国語の声調との関係はあまり見られない
- ③漢字の音読みが二重母音のものはほばない
- ④その他（例えば既知度が高い）

含まれる単語は「推測」「隔日」「水滴」「確実」「一目（いちもく）」「学術」「食欲」「極楽」「肉体」「的確」「国立」「哲学」である。

図1はこのグループの発音状況を示している。

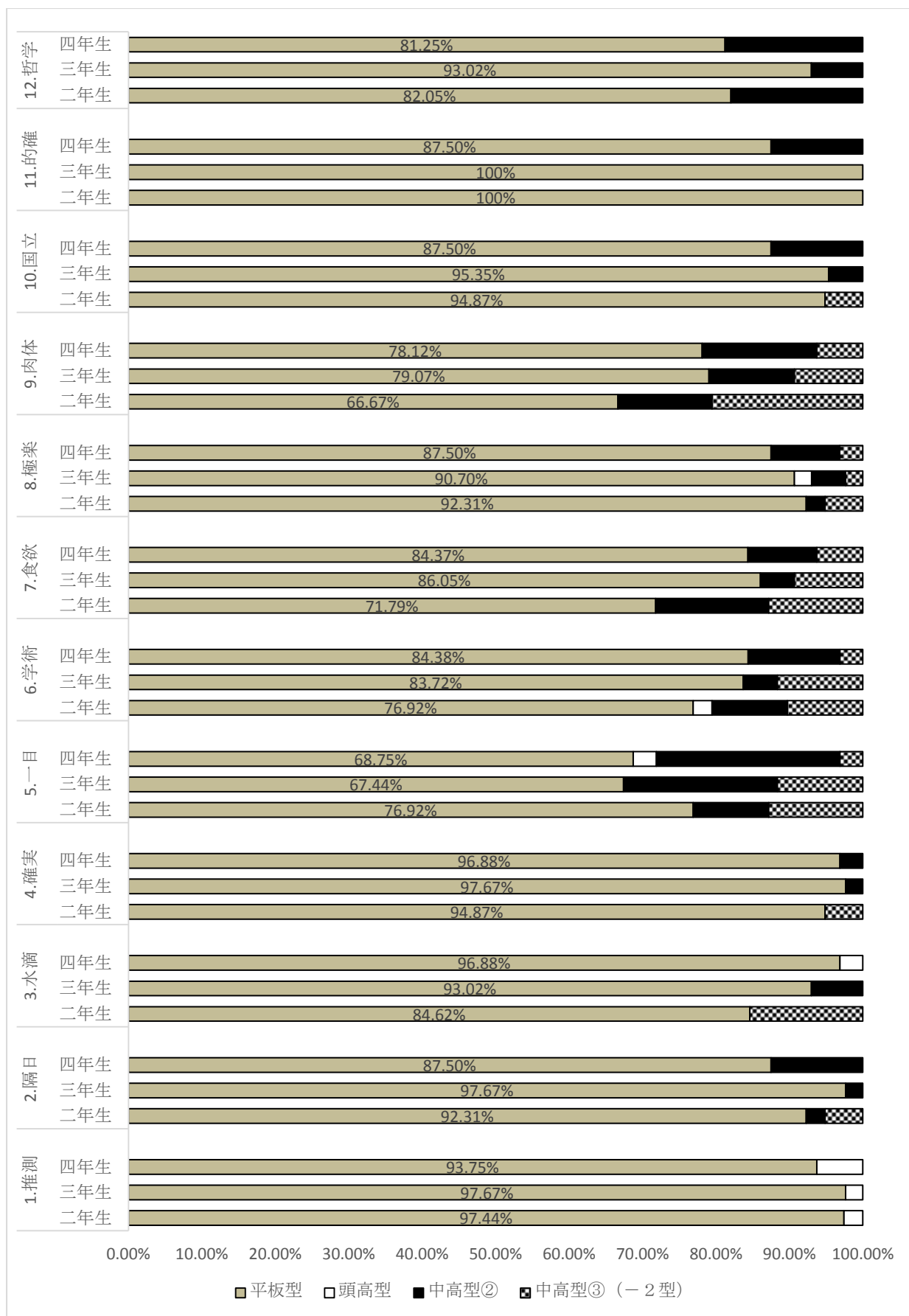


図1 「問題にならない」単語の発音状況

以下より詳しく分析する。

6.1.1. 「推測」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「推測」のアクセント型は「平板型」である。中国語では字形がやや異なるが、意味は一致している二字詞「推測（tuī cè）」があり、声調は「第1声＋第4声」である。先行研究では、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音してしまう傾向があると述べられているが、予備調査ではほとんど見られなかった。

図2は「推測」の発音状況を示している。

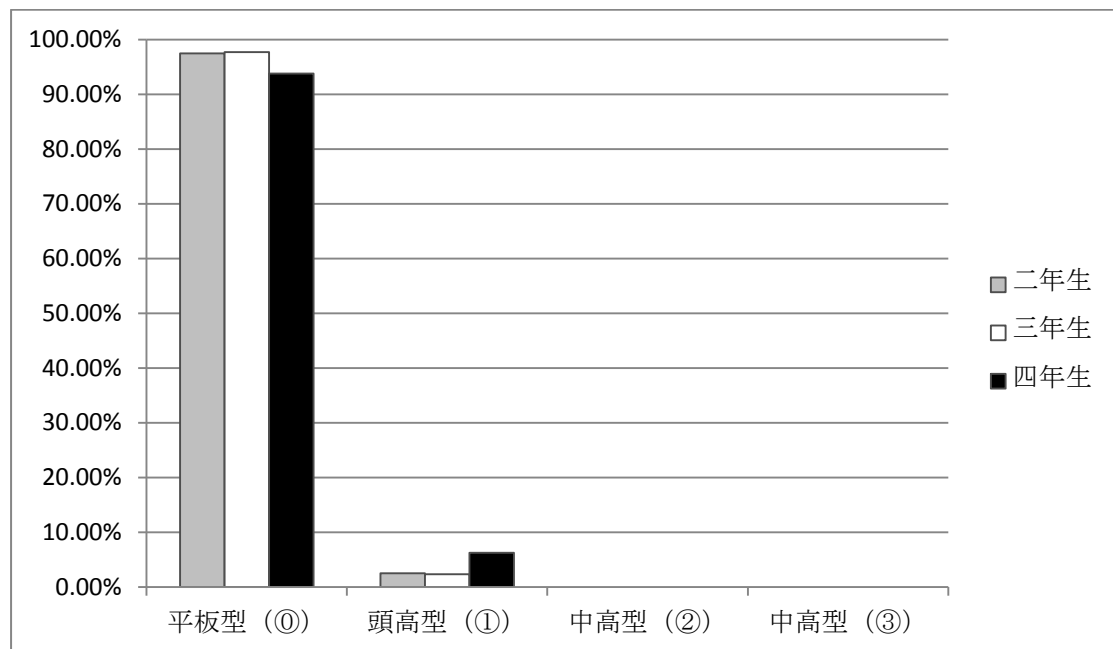


図2 二字漢語「推測」の発音状況

予備調査と同じく、平板型で発音した学習者の数が圧倒的に多い。二年生は38人（97.44%）、三年生は43人（97.67%）、四年生は30人（93.75%）が平板型で発音している。フォローアップインタビュー結果からみても、「推測」という単語の既知度はかなり高く、平板型で正しく発音されることも当然であると思う。

しかし、ごく一部の学習者は「頭高型」で発音している。二年生1人、三年生1人、四年生2人。既知度の調査結果によると、四人とも「知っているけど使わない」を選択していた。さらに、フォローアップインタビューの問題2について、二年生の学習者は「直感に頼る」、残りの3人は「母語の影響を受けて日本語のアクセントを推測する」と答えた。

6.1.2. 「隔日」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「隔日」のアクセント型は「平板型」である。中国語には字形がやや異なるものの（「隔」と「隔」）、意味が一致している二字詞「隔日（gérì）」があり、声調は「第2声＋第4声」である。先行研究では、学習者が第2声で発音する漢字を「頭高型」で発音してしまう傾向があると述べられており、予備調査でもそういう傾向が見られていた。

図3は「推測」の発音状況を示している。

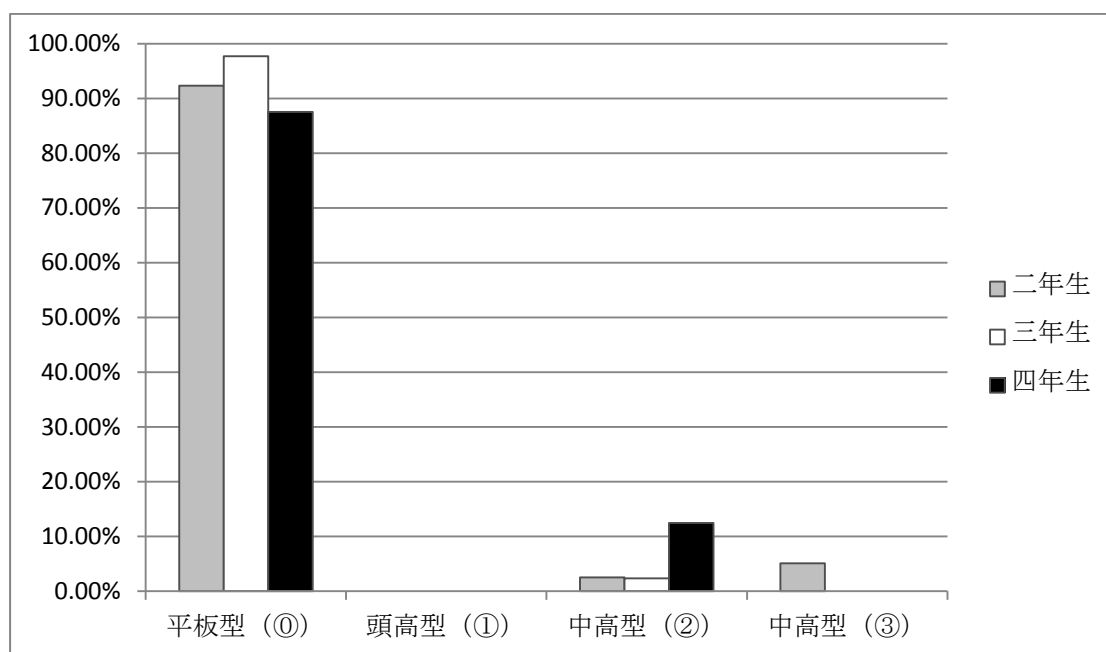


図3 二字漢語「隔日」の発音状況

「推測」と同じく、「隔日」では「平板型」で発音した学習者の数が圧倒的に多い。二年生は36人（92.31%）、三年生は42人（97.67%）、四年生は32人（87.50%）人平板型で発音している。フォローアップインタビューによると、「隔日」は学習者があまり使わない単語である。中国語の声調は「第2声＋第4声」、「↗↘」のように発音する。

多くの調査対象者は「平板型」で正しく発音している。その理由については、まず既知度があまり高くないため、「とりあえず平板型で発音する」学習者が多い。また四声の影響から見れば、「第2声＋第4声」の組み合わせは波のように発音するより、一直線で発音したほうが日本語らしいという考え方を持っている学習者がいる。この点は先行研究の推論と一致していない。

一方、一部の学習者は「中高型」で発音している。二年生 1 人、三年生 1 人、四年生 4 人はアクセント核を二拍の「く」に置き、残りの二年生 2 人は三拍の「じ」に置いている。フォローアップインタビューによると、全員が「直感に頼る」などと答えていたが、声調からの影響も多少に受けていると考えられる。

6.1.3. 「水滴」(平板型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「水滴」のアクセント型は「平板型」である。中国語には字形と意味が同じ二字詞「水滴 (shuǐ dī)」があり、声調は「第 3 声+第 1 声」である。先行研究では、学習者が第 1 声・第 3 声で発音する漢字を「平板型」で発音する傾向があると述べられており、予備調査でもそういう傾向が見られたが、四声の影響との関連性があるかどうかはまだ疑わしい。

図 4 は「水滴」の発音状況を示している。

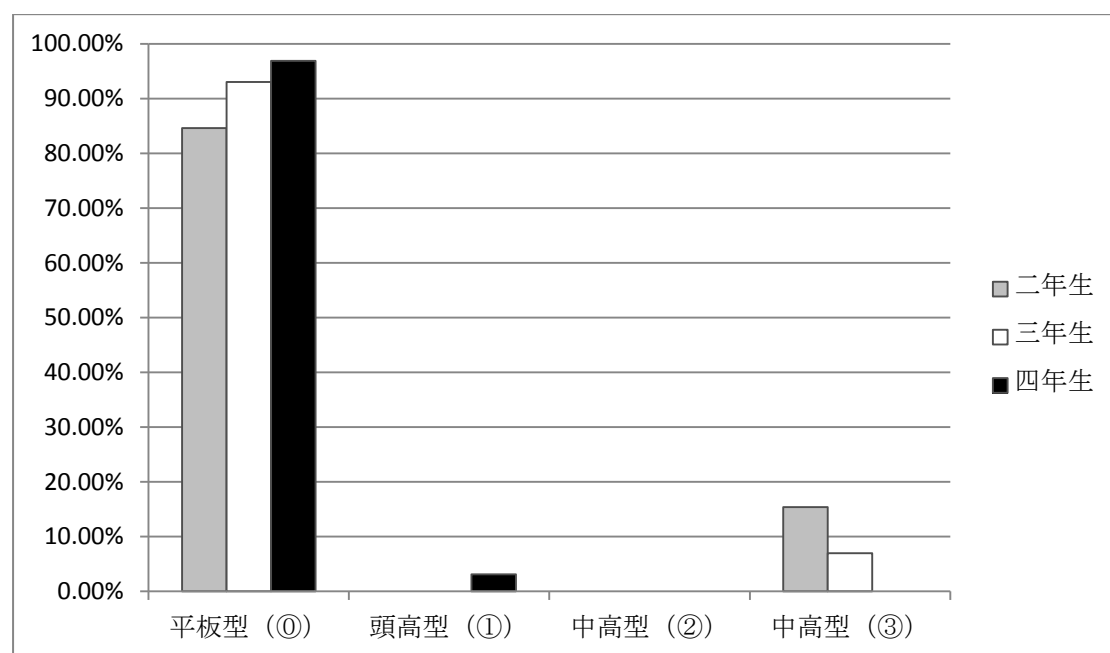


図 4 二字漢語「水滴」の発音状況

図 4 からみると、「水滴」を「平板型」で発音した学習者の数が圧倒的に多い。二年生は 33 人 (84.62%)、三年生は 40 人 (93.02%)、四年生は 31 人 (96.88%) が平板型で発音している。フォローアップインタビューによると、「水滴」も学習者があまり使わない単語である。中国語の声調が「第 3 声+第 1 声」、「ㄣノ→」のように発音する。

ほぼ全員が「平板型」で正しく発音した。その理由については、フォローアップインタビューによると、「なんとなく」「特に理由はない」「とりあえず平板型で発音す

る」と答えている学習者が多い。また四声からの影響から見れば、「第3声+第1声」はあまり上がり目や下がり目が著しくないので、平板型で発音する学習者が多い。それが先行研究の推論と一致している。

また、二年生 6 人 (15.38%)、三年生 3 人 (6.98%) は中高型③ (アクセント核は三番目の仮名「て」) で発音した。前記と同じく、「低低高低」という型は東京式アクセントではないが、それが学習者の学習不足だと判断している。さらに四年生ほぼ全員が正しく発音したが、1 人の学生が「頭高型」で発音した。その理由を訪ねて、「「すい」という組み合わせをみると、なんとなく下降調で発音するがちだ」と答えた。おそらく [a]+[i] だけではなく、二重母音の場合では、中国語母語話者にとって一音節とみられるため、切れ目なく一気に発音して、上がり目や下がり目が出やすいと推測している。

6.1.4. 「确实」 (平板型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「确实」のアクセント型は「平板型」である。中国語の“确实”と比べて、意味がほぼ同じだが、かなり字形が違っているとみられる。中国語の声調は「第4声+第2声」である。先行研究では、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べられているが、予備調査はそういう傾向が見られなかった。

図5は「确实」の発音状況を示している。

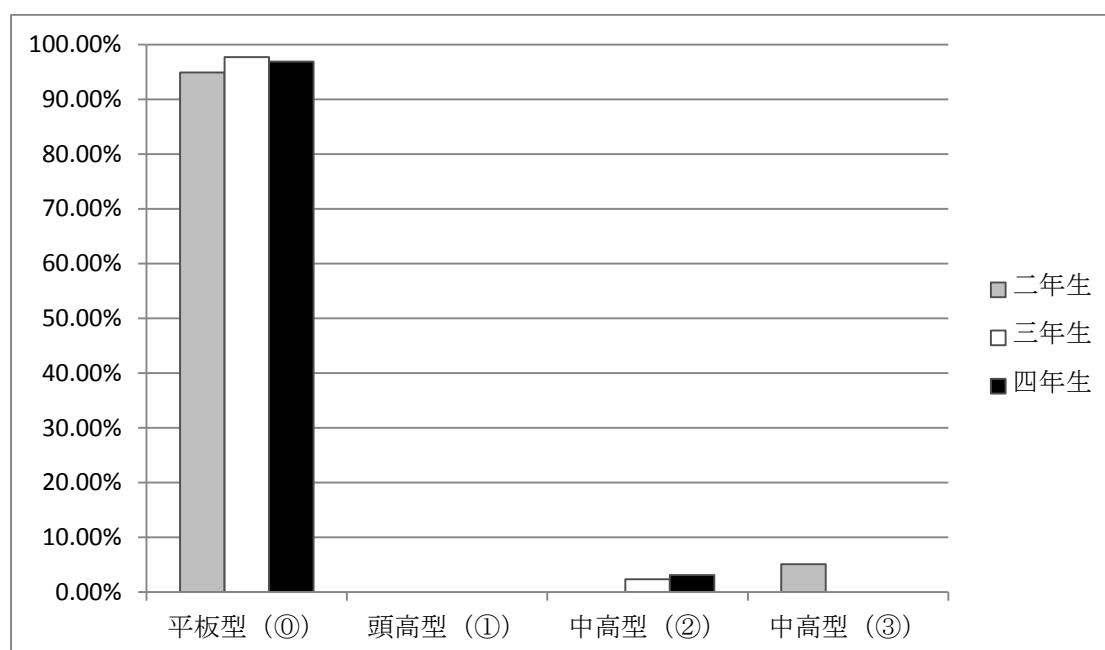


図5 二字漢語「确实」の発音状況

前記の言葉と同じく、「確実」を「平板型」で発音した学習者の数が圧倒的に多いとみられる。二年生は 37 人 (94.87%)、三年生は 42 人 (97.67%)、四年生は 31 人 (96.88%) が平板型で発音している。フォローアップインタビューによると、「確実」の既知度は高い。中国語の声調が「第 4 声 + 第 2 声」、「ㄣ ㄨ」のように発音する。

ほぼ全員が「平板型」で正しく発音できていた。その理由は既知度が高くて、学習者の使用語彙であると考えられる。また、日中で字形が異なっているため、中国語の同形語と認識するより、新しい単語として学習する学習者も多いと推測される。

中国語の四声から見ると、「第 4 声 + 第 2 声」の組み合わせは下がり目と上がり目が著しくて、学習者が「頭高型」で発音することが想定されたが、平板型で発音する学習者が多いとみられ、先行研究の推論とは一致していない。

また、二年生 2 人 (5.13%) は中高型③ (アクセント核は三拍の「じ」) で発音した。学習不足だと判断されるが、なぜこのように発音するのかは不明である。三年生 1 人 (2.33%)、四年生 1 人 (3.12%) は中高型② (アクセント核は二拍の「く」) で発音する。フォローアップインタビューではその理由を「直観に頼る」と書いており、より深く分析する必要があると考えられる。

最後に、学習レベルの上昇とアクセントの誤りの減少との関連もみられる。三年生と四年生は「中高型③」で発音した例は一つもない。

6.1.5. 「一目」 (平板型・中高型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「一目」のアクセント型は「中高型②」と「平板型」の二種類がある。中国語には字形・意味がほぼ一致している“一目 (yī mù)”がある。中国語の声調は「第 1 声 + 第 4 声」であり、「→ ㄣ」のように発音するが、実際には「第 2 声 + 第 4 声」で発音する母語話者が多い。先行研究によると、学習者が第 4 声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、予備調査では「中高型」や「平板型」で正しく発音した学習者のほうが多かった。

図 6 は「一目」の発音状況を示している。

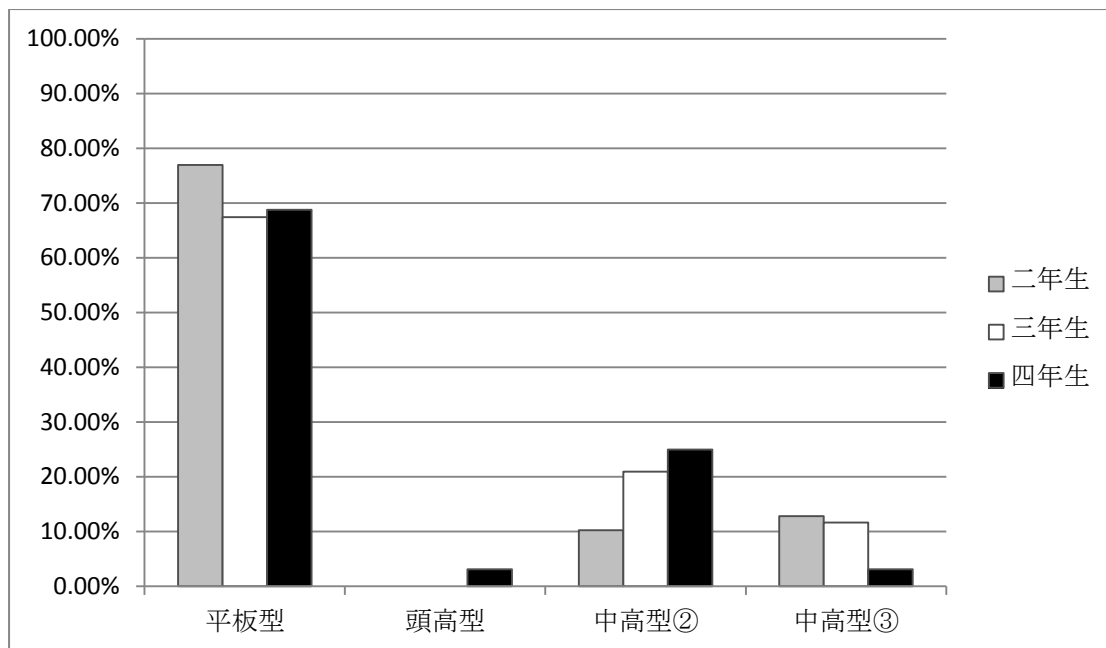


図 6 二字漢語「一目」の発音状況

図 6 の示すように、「一目」を「平板型」で発音した学習者の数が多く、二年生 30 人（76.92%）、三年生 29 人（67.44%）、四年生 22 人（68.75）である。中高型②（アクセント核は二番目の拍「ち」）で発音した学習者は二年生 4 人（10.26%）、三年生 9 人（20.93%）、四年生 8 人（25.00%）いた。そして、中高型③（アクセント核は三番目の拍「も」）で発音した学習者は二年生 5 人（12.82%）、三年生 5 人（11.63%）、四年生 1 人（3.12%）である。正答率がかなり高いが、「平板型」や「中高型②」を選んだ理由を聞いてみると、以下のような答えを得た。

フォローアップインタビューによると、「一目」という言葉は既知度がかなり低いとみられる。しかし、かなり多くの学習者が「数詞「いち」を初級のときに学習したので、見るたびに反射的に上昇調で読みがちである」と答えた。また、「一～」のような二字漢語（一日、一列、一番など）は教材に頻繁に出現するため、すでに学習した語彙から派生語のアクセントを類推できるという考え方もある。

それに対して、四声の影響を受けて、山形のように「一目」を中高型で発音する可能性があるが、理由としてこう述べた学習者は二年生の 1 人しかいない。「一目」の発音状況から四声の影響の有無を確認することは困難であろう。

6.1.6. 「学術」（平板型・中高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「学術」のアクセント型は「中高型②」と「平板型」の二種類がある。中国語の“学术”と比べて、「術」の字形がかなり異なっているが、意味は同じである。声調は「第2声+第4声」であり、「↗↘」のように発音する。先行研究によると、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、予備調査では「中高型」や「平板型」で正しく発音した学習者のほうが多かった。

図7は「学術」の発音状況を示している。

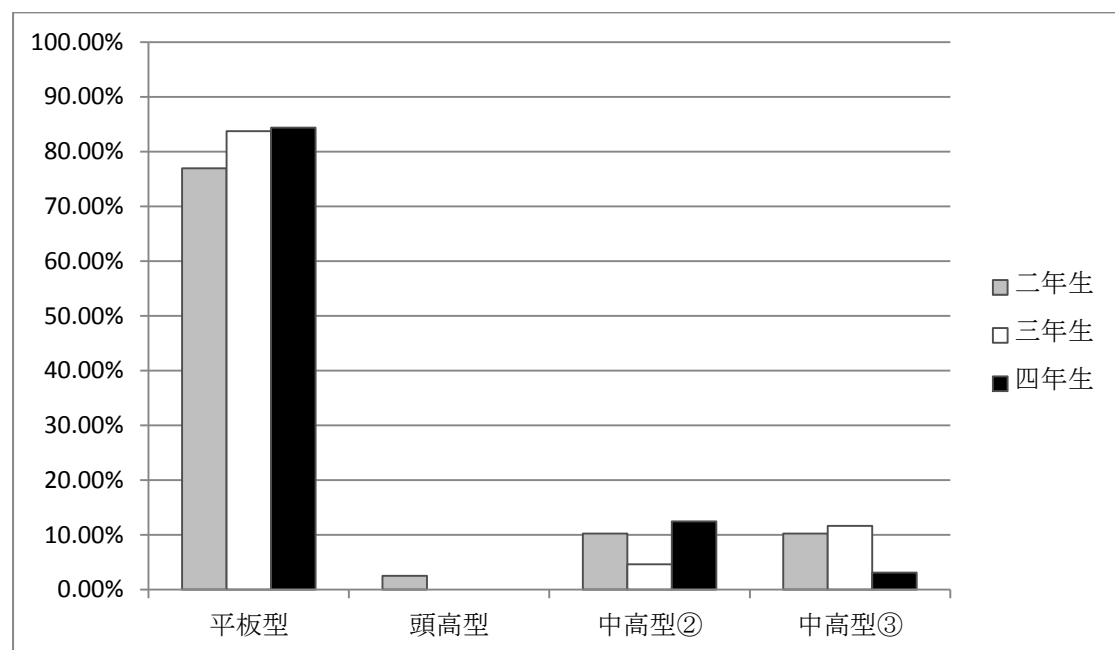


図7 二字漢語「学術」の発音状況

図7の示すように、「学術」を「平板型」で発音した学習者の数がもっとも多い、二年生 30 人（76.92%）、三年生 36 人（83.72%）、四年生 27 人（84.38%）。それに対して、起伏式で発音した学習者の人数は少ない。正解率が高いが、「平板型」「中高型②」を選んだ理由については、まだ分析する必要があると思われる。

フォローアップインタビューによると、多くの学習者が平板型を選んだ理由は語感や直観などに頼るとのことであるが、一部分の学習者はすでに学習した「学校」「学生」などの語彙が平板型であるため、同じグループに属する「学術」も平板型で発音するはずであると説明した。つまり、学習者は既知度が低い単語のアクセントは、従来習った語彙（または単漢字）から判断するのが良い方法であると考えていると推測される。

また、“学术”の声調は「第2声+第4声」で、「↗↘」のように発音するが、実際には「母語の声調によって「学术」のアクセントを判断する」と答えた学習者はいない。むしろ既知の日本語から、「未知」の日本語を推測するほうが、学習者にとってより信頼性が高い学習方法であるのであろう。

6.1.7. 「食欲」（平板型・中高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「食欲」のアクセント型は「中高型②」と「平板型」の二種類がある。中国語には字形・意味が一致している“食欲（shí yù）”がある。中国語の声調は「第2声+第4声」であり、「↗↘」のように発音する。先行研究によると、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、予備調査では「中高型」や「平板型」で正しく発音した学習者のほうが多かった。

図8は「食欲」の発音状況を示している。

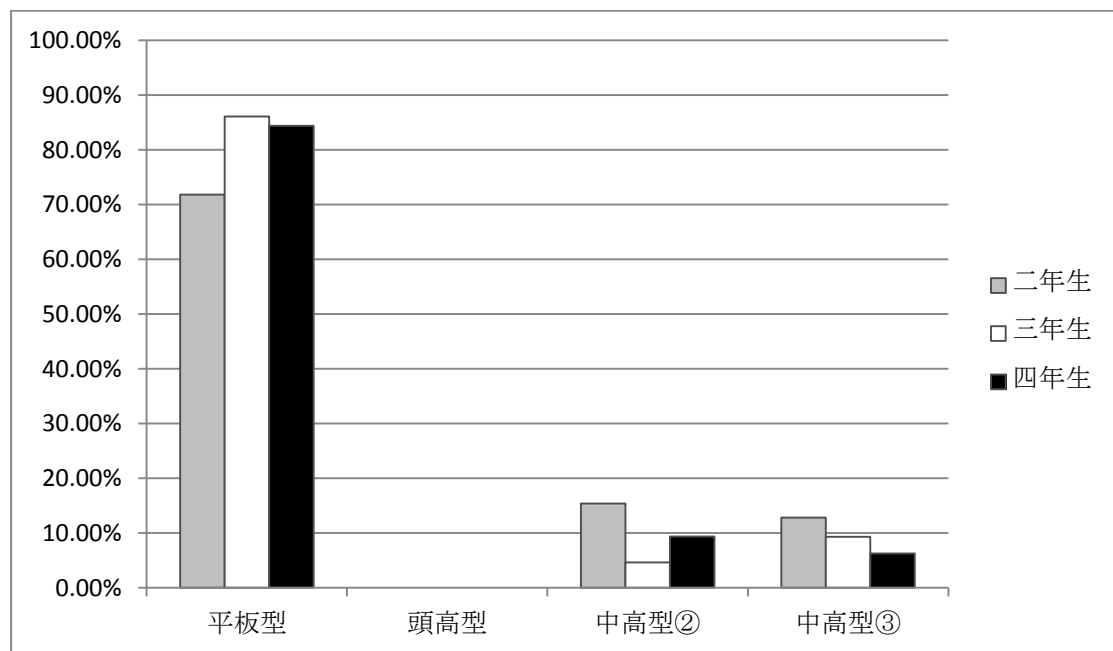


図8 二字漢語「食欲」の発音状況

図8の示すように、「食欲」を「平板型」で発音した学習者の数がもっとも多く、二年生 28 人（71.79%）、三年生 37 人（86.05%）、四年生 27 人（84.37%）である。中高型②（アクセント核は二番目の拍「く」）で発音した学習者は二年生 6 人（15.39%）、三年生 2 人（4.65%）、四年生 3 人（6.25%）である。中高型③（アクセント核は三番目の拍「よ」）で発音した学習者は二年生 5 人（12.82%）、三年生 4 人（9.30%）、四年

生 2 人（6.25％）である。学習歴が長くなっても、正答率はあまり変わらない。そこで「平板型」や「中高型②」を選んだ理由を聞いてみると、以下のような答えを得た。

フォローアップインタビューによると、かなり多くの学習者が「食堂」や「食事」などの語彙から、既知度がやや低い「食欲」のアクセントを推測したとみられる。それに対して、四声の影響で山形のように「食欲」を中高型で発音する可能性があるが、そういう理由を答えた学習者はいなかったため、四声の影響の有無を確認することは困難であろう。

6.1.8. 「極楽」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「極楽」のアクセント型は「平板型」である。中国語の“极乐”と比べて、字形がかなり異なっているが、意味は同じである。中国語の声調は「第 2 声＋第 4 声」である。先行研究は学習者が第 4 声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、本調査ではあまり見られなかった。

図 9 は「極楽」の発音状況を示している。

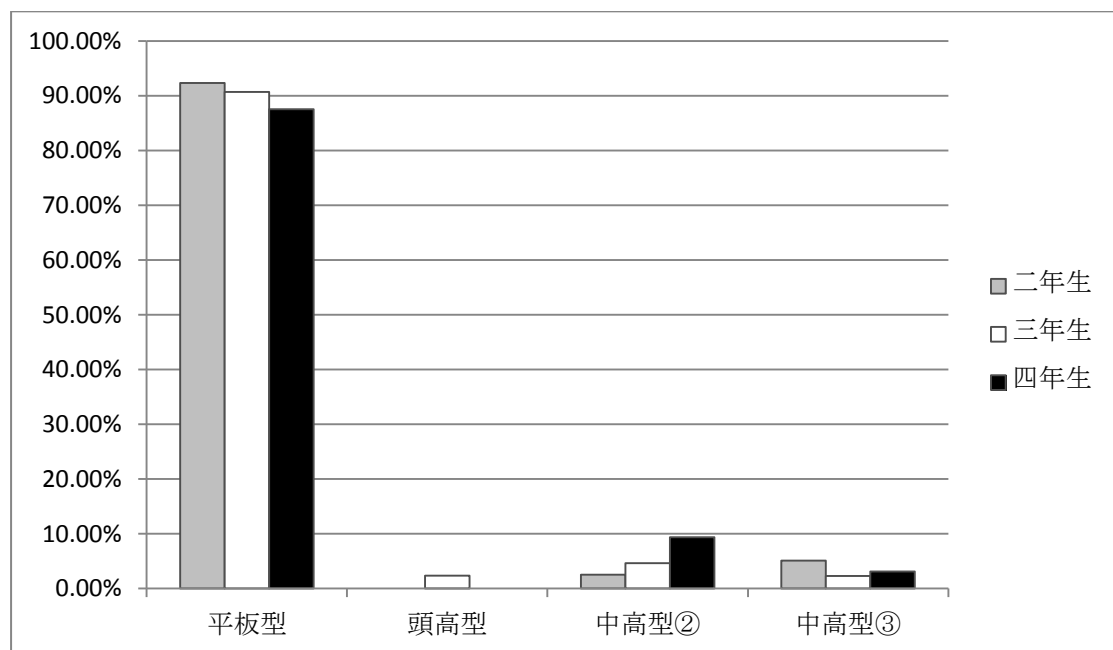


図 9 二字漢語「極楽」の発音状況

図 9 の示すように、「極楽」を平板型で発音した学習者の数が最も多く、二年生 36 人（92.31％）、三年生 39 人（90.70％）、四年生 28 人（87.50％）いた。起伏式で発音した学習者はほとんどみられなかった。

「極楽」は中国語の声調が「第2声+第4声」で、「↗↘」のように発音するが、学習者はほぼ声調からの影響を受けず、平板型で発音した。フォローアップインタビューによると、「極楽」は学習者があまり使わない単語であったが、アニメーションやテレビ番組で「極楽浄土」という四字熟語がみられるという。そのため、役者や声優などのアクセントを真似して発音した学習者が多くいる。

それに対して、起伏式で発音する学習者が非常に少ない。「快樂」と違い、[a]+[i]（二重母音）の組み合わせがないので、漢字一文字を一音節とするより、「ごくらく」と四拍ではっきりと発音するのが自然である。したがって、平板型で発音した学習者が圧倒的に多いのは不思議ではないと考えられる。

6.1.9. 「肉体」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「肉体」のアクセント型は「平板型」である。中国語には字形・意味がほぼ一致している“肉体（ròu tǐ）”がある。中国語の声調は「第4声+第3声」であり、「↘↘↗」のように発音する。先行研究によると、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、本調査ではほとんどみられなかった。

図10は「肉体」の発音状況を示している。

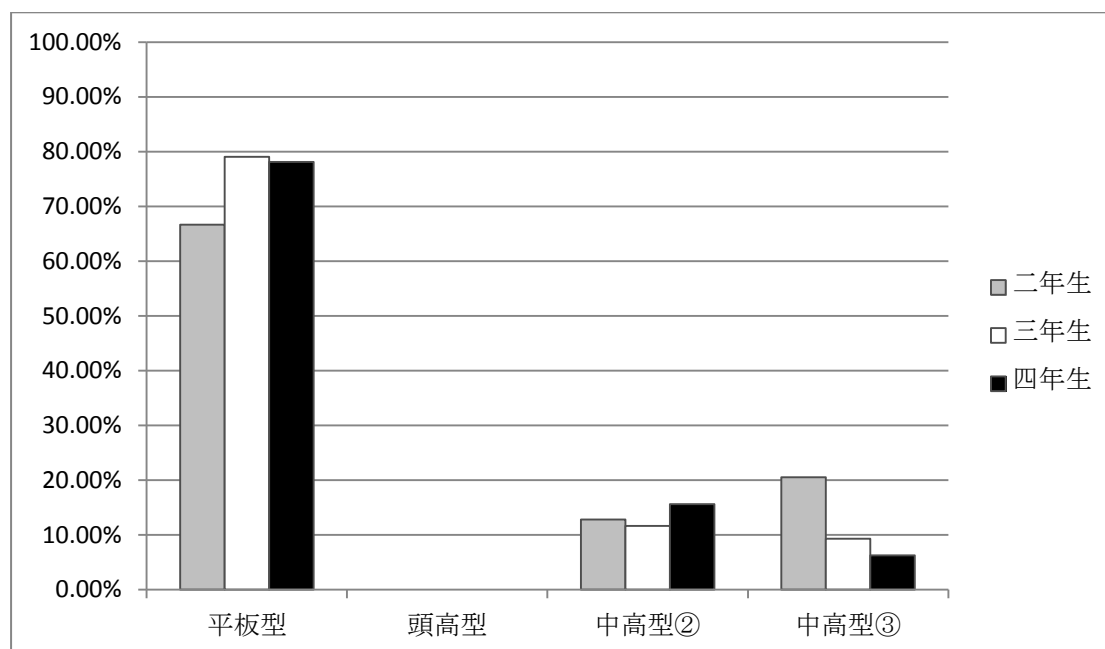


図10 二字漢語「肉体」の発音状況

図 14 の示すように、平板型で発音した学習者が圧倒的に多く、二年生 26 人、三年生 34 人、四年生 25 人いた。ほかの単語と比べて正答率がかなり高いが、中高型で発音した学習者もいる。フォローアップインタビューによると、「肉体」は学習者の使用語彙ではないとみられるが、数多くの学習者が「平板型で発音するのが最も無難なのでそうした」と答えた。

また、声調の影響からみると、第 4 声が含まれ、その影響を受けて頭高型で発音した学習者が 1 人しかいないため、声調の影響は要因ではないと考えられる。

6.1.10. 「国立」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「国立」のアクセント型は「平板型」である。中国語にも字形・意味が同じ二字詞「国立（guó1lì）」がある。中国語の声調は「第 2 声＋第 4 声」である。先行研究は学習者が第 4 声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、本調査ではあまり見られなかった。

図 11 は「国立」の発音状況を示している。

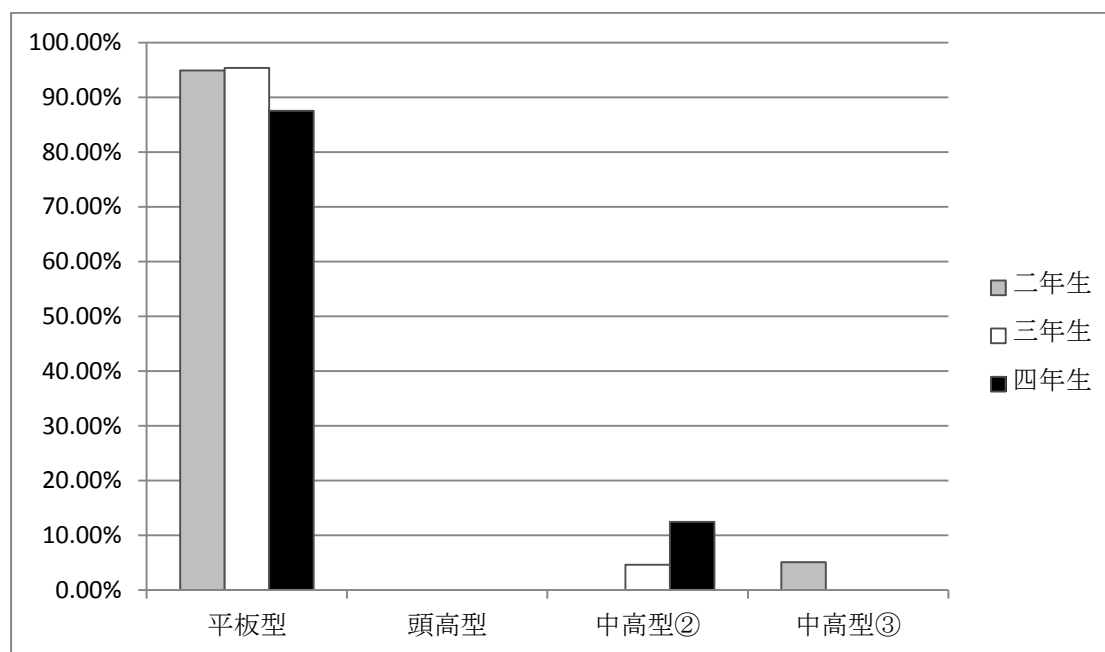


図 11 二字漢語「国立」の発音状況

図 11 の示すように、「国立」を平板型で発音した学習者の数が最も多く、二年生 37 人（94.87%）、三年生 41 人（95.35%）、四年生 28 人（87.50%）いた。起伏式で発音した学習者はほとんどみられなかった。

「国立」は中国語の声調が「第2声+第4声」で、「ㄨˊㄣˋ」のように発音するが、学習者はほぼ声調からの影響を受けず、平板型で発音した。フォローアップインタビューによると、「国立」は学習者があまり使わない単語である。そのため、「とりあえず平板型で発音しよう」と考えた学習者がかなり多かったと思われる。

それに対して、起伏式で発音した学習者は非常に少なかった。「極楽」と同じく、「こくりつ」のように四拍ではっきりと発音するのが自然である。したがって、平板型で発音した学習者が圧倒的に多いのは不思議ではないと考えられる。

6.1.11. 「的確」(平板型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「的確」のアクセント型は「平板型」である。中国語にも字形・意味がほぼ同じ二字詞「的确(díqùè)」がある。中国語の声調は「第2声+第4声」である。先行研究では学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、本調査では見られなかった。

図12は「的確」の発音状況を示している。

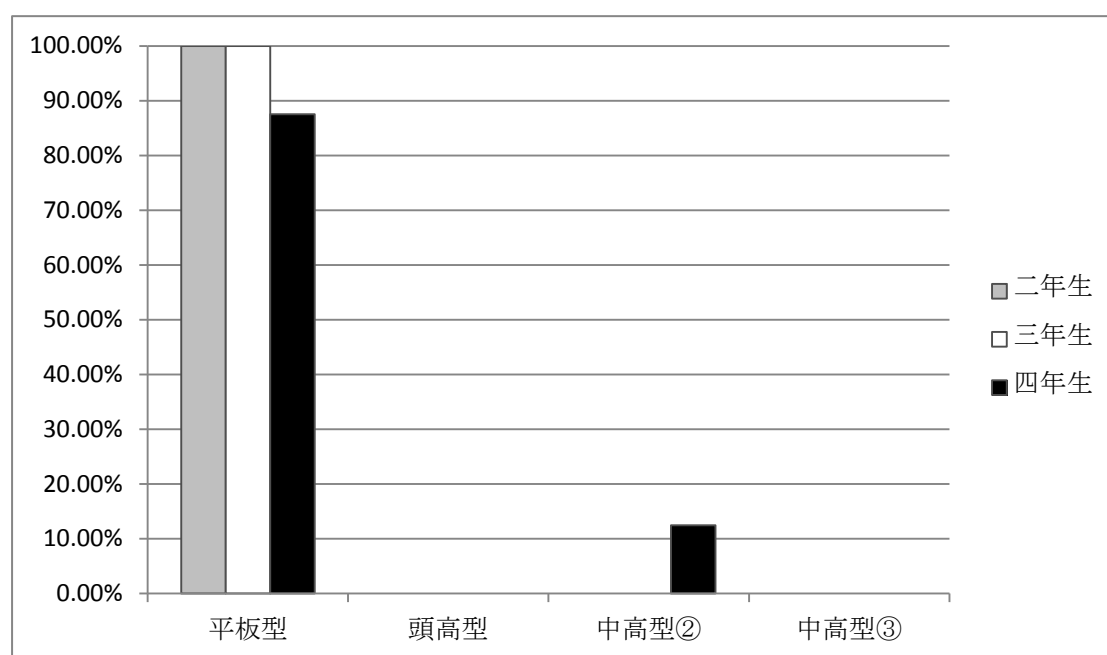


図12 二字漢語「的確」の発音状況

図12の示すように、ほぼ全員の学習者が「的確」を平板型で発音した。中高型②で発音した学習者は四年生4人しかいなかった。

「的確」は中国語の声調が「第2声+第4声」で、「ㄨˊㄣˋ」のように発音するが、学習者はほぼ声調からの影響を受けず、平板型で発音した。フォローアップインタビュー

によると、「的確」は学習者があまり使わない単語である。そのため、「とりあえず平板型で発音しよう」と考えた学習者がかなり多いと思われる。

それに対して、中高型で発音した学習者は非常に少ない。「極楽」「国立」と同じく、「こくりつ」のように四拍ではっきりと発音するのが自然である。したがって、平板型で発音した学習者が圧倒的に多いのは不思議ではないと考えられる。

6.1.12. 「哲学」（平板型・頭高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「哲学」のアクセント型は「中高型②」と「平板型」の二種類がある。中国語の“哲学”と字形も意味も同じである。声調は「第2声+第2声」であり、「ㄉㄉ」のように発音する。先行研究によると、学習者が第2声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、本調査では「中高型」や「平板型」で正しく発音した学習者のほうが多かった。

図13は「哲学」の発音状況を示している。

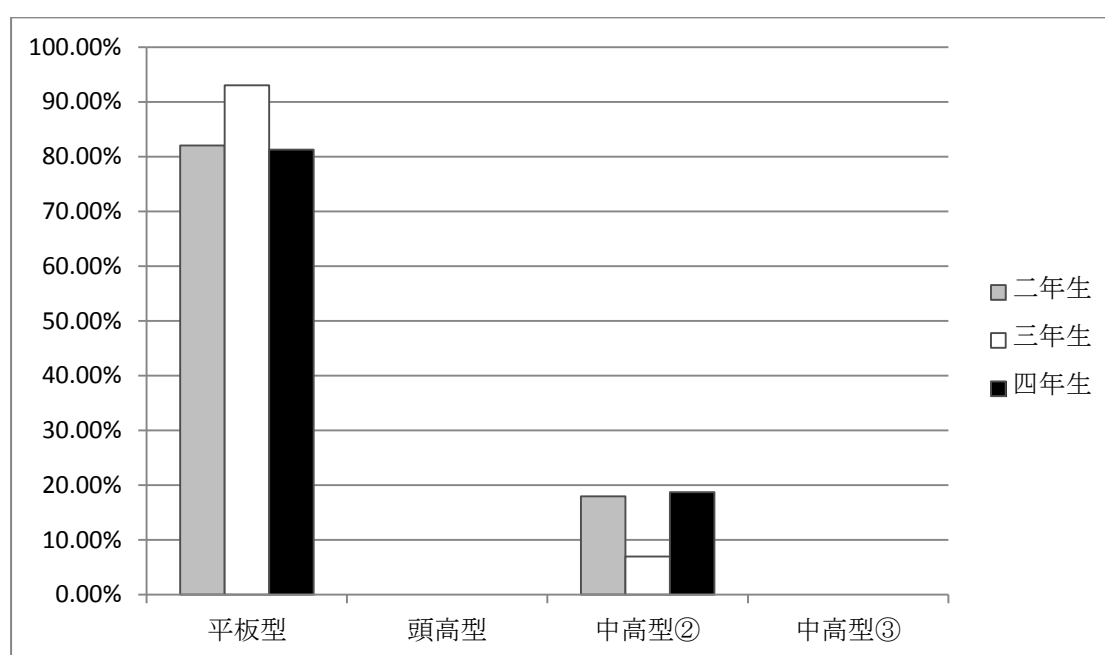


図13 二字漢語「哲学」の発音状況

図13の示すように、「哲学」を「平板型」で発音した学習者の数がもっとも多い（二年生 32人（82.05%）、三年生 40人（93.02%）、四年生 26人（81.25%））。それに対して、起伏式で発音した学習者の人数は少ない。正解率が高いが、「平板型」「中高型②」を選んだ理由については、まだ分析する必要があると思われる。

フォローアップインタビューによると、多くの学習者が平板型を選んだ理由は語感や直観などに頼るとのことであるが、一部の学習者はすでに学習した「大学」「独学」などの語彙が平板型であるため、同じグループに属する「哲学」も平板型で発音するはずであると説明した。つまり、学習者にとって既知度が低い単語のアクセントは、それまでに習った語彙（または単漢字）から判断するのが良い方法であると考えていると推測できる。

また、“哲学”の声調は「第2声+第2声」で、「ノノ」のように発音するが、実際には「母語の声調によって「哲学」のアクセントを判断する」と答えた学習者はいない。むしろ既知の日本語から、「未知」の日本語を推測するほうが、学習者にとってより信頼性が高い学習方法であるのであろう。

6.2. 正答率が低い単語

本調査によると、学習者が最も頻繁に使用するアクセント型は平板型であるが、起伏式の単語を平板式で、あるいは平板式の単語を起伏式で発音した例がよく見られた。学習者にとってアクセントがなかなか習得し得ないものなので、改めて典型的な誤りを覚えなければと考える。以下は本調査でよく現れるアクセントの誤りである。

①頭高型を平板型にした。例えば「催促」「体力」「歳月」「快樂」。まず四つの単語とも既知度が低い。そのため、学習者がよく安易に平板型で発音する。一方、一部の学習者も起伏式で扱おうとしても、発音上の問題が生じてかえって正しく発音できなくなった（-2型になった）。図14は学習者の発音状況を示している。

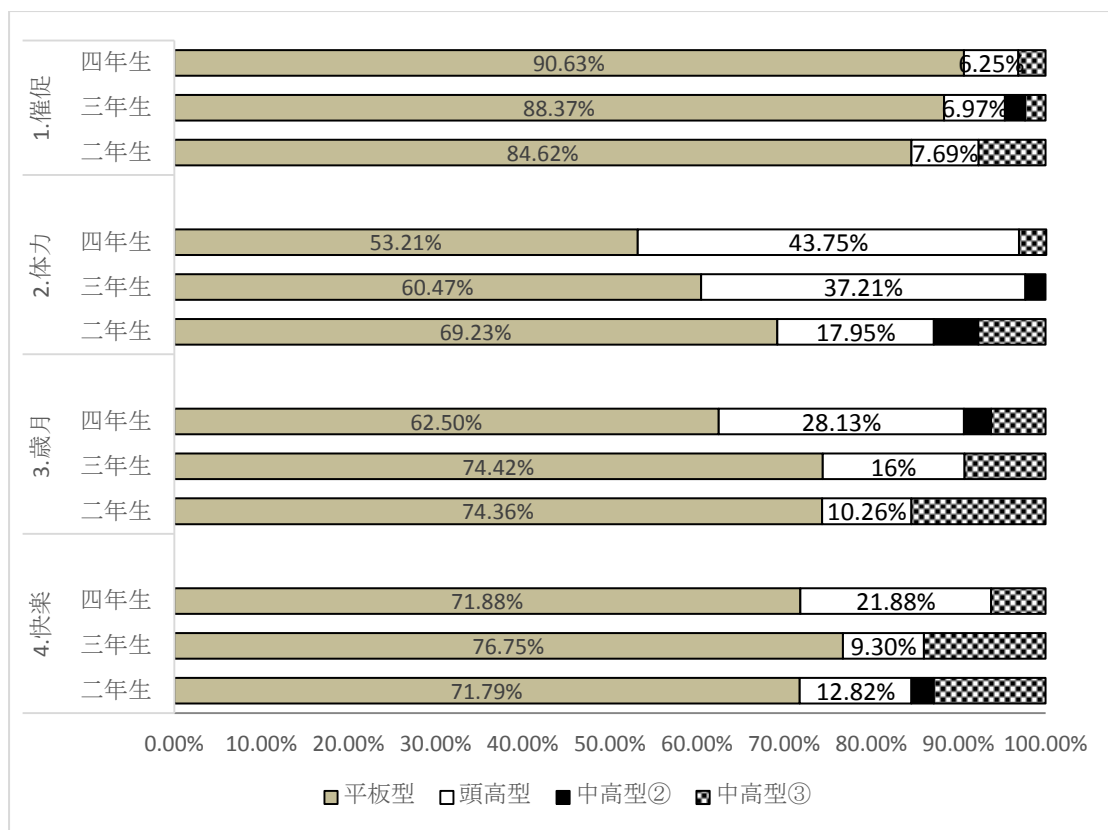


図 14 「催促」「体力」「歲月」「快樂」の発音状況

②平板型を頭高型にした。例としては「背景」「退会」「体格」「墜落」。二重母音があり、そして声調（特に第4声）の影響で、思わず下降調で発音した学習者が多い。

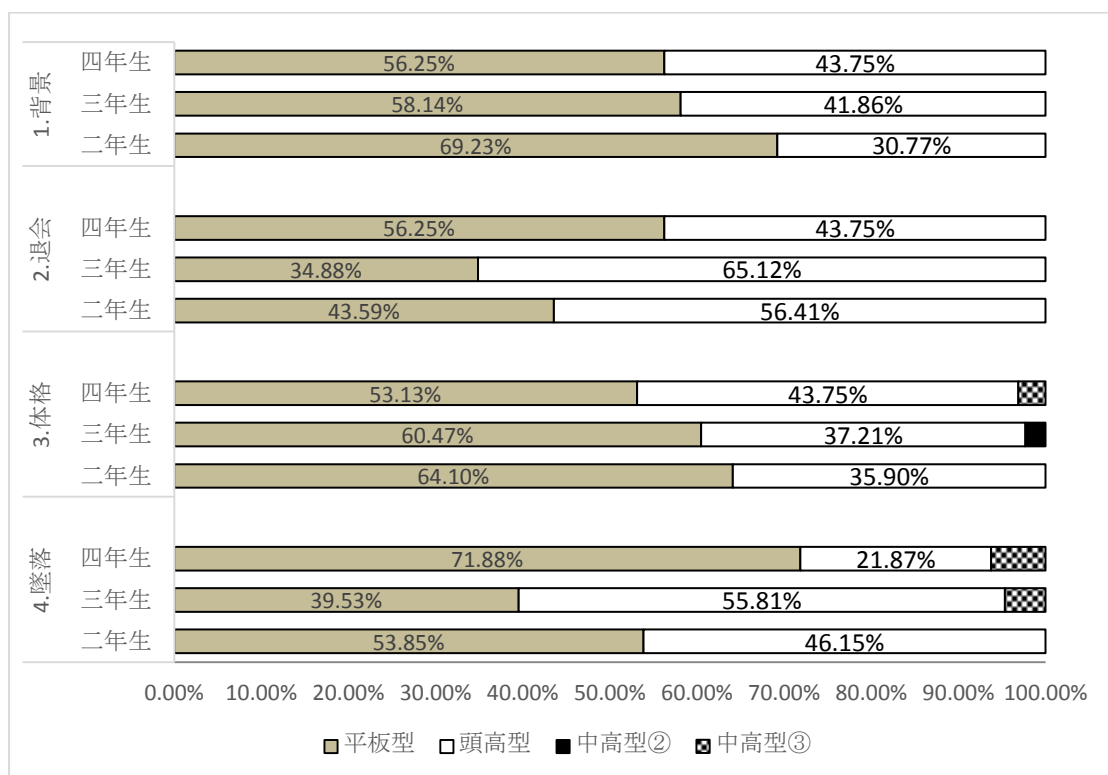


図 15 「背景」「退会」「体格」「墜落」の発音状況

③中高型の「圧力」を平板型にした。声調との関係はあまり見られないが、二重母音が含まれていないためのか、あるいは中高型より平板型の方が安全であると見られるのか、まだ明らかにしていない。

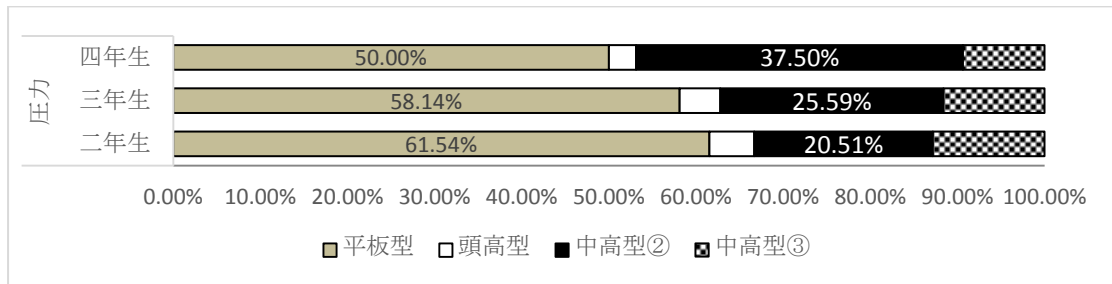


図 16 「圧力」の発音状況

④平板型の「色彩」を中高型にした。二重母音の「さい」があるから、母語の影響で自然と一音節として認識し、発音した可能性がある。

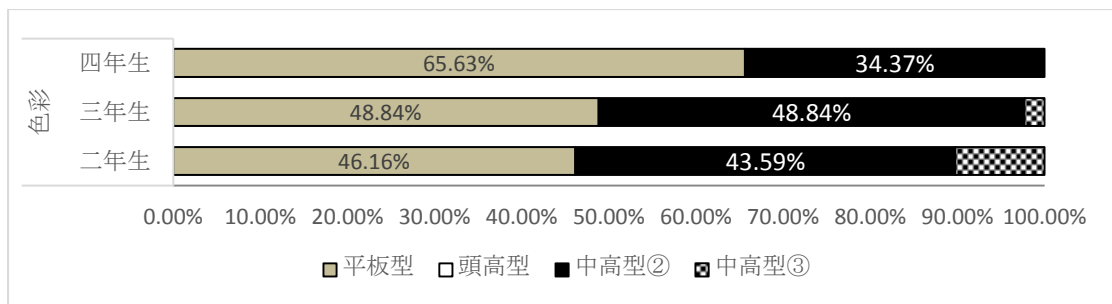


図 17 「色彩」の発音状況

⑤-2 型の使用（アクセント核は三番目の拍）。調査中では多く聞かれたが、典型的なのは「内閣」「室内」「独裁」の発音である。東京式アクセントに関する知識まだ身につけていない、あるいは「中高型②」で発音しようとしても、母語話者から聞くと「中高型③」に聞こえる可能性も非常に高いと考えられる。この点についてより深く分析する必要がある。

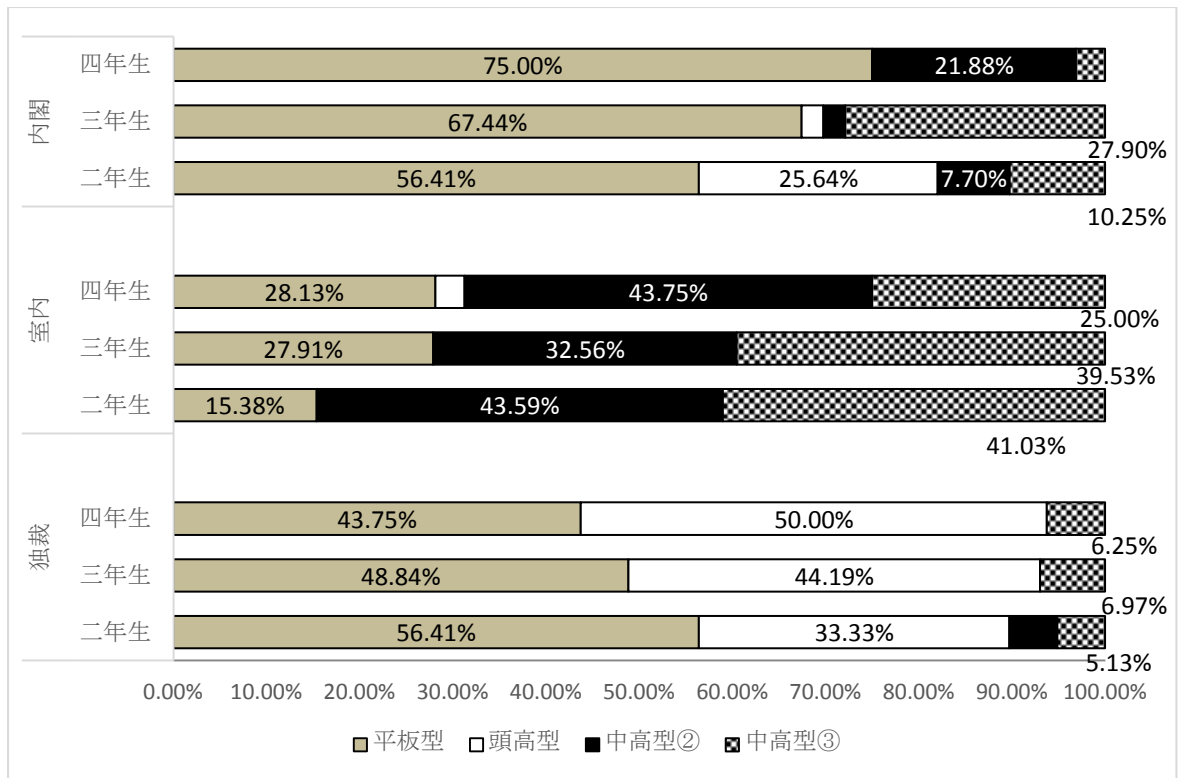


図 18 「内閣」「室内」「独裁」の発音状況

以下は詳しく説明する。

6.2.1. 「催促」（頭高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「催促」のアクセント型は「頭高型」である。中国語には字形と意味が同じ二字詞“催促 (cuī cù)”があり、声調は「第 1 声＋第 4 声」である。予備調査では「平板型」で発音する学習者の数多くて、先行研究の推論と一致している。

図 19 は「催促」の発音状況を示している。

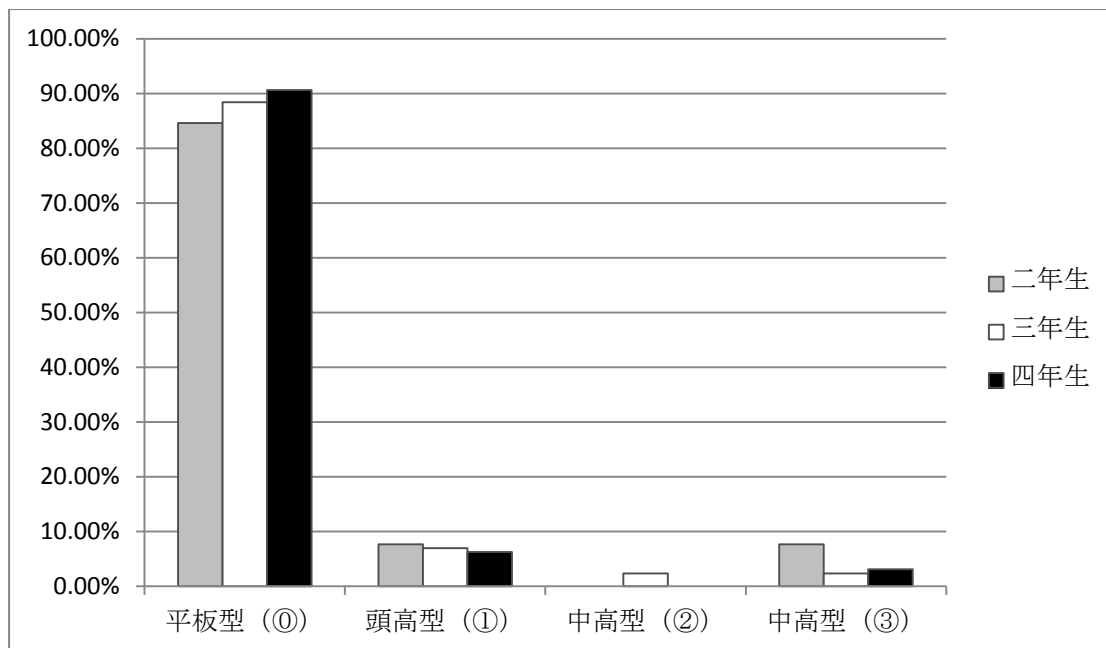


図 19 二字漢語「催促」の発音状況

図 19 から、「頭高型」の「催促」を「平板型」で発音した学習者の数がかかなり多かった。二年生は 33 人、三年生は 38 人、四年生は 29 人が平板型で発音している。フォローアップインタビューによると、「催促」は学習者があまり使わない単語である。中国語の声調は「第 1 声＋第 4 声」、「→↘」のように発音する。

「頭高型」で発音すべき言葉を「平板型」で発音する理由は、以下のように考えられる。まず、フォローアップインタビューによると、「なんとなく」「特に理由はない」「とりあえず平板型で発音する」と答えた学習者が多い。既知度が低く、辞書で調べないと正しいアクセントを自然に習得できない。また、文法教育などより音声教育への関心度が低く、安易に「すべて知らない単語を平板型で発音すれば無難だ」と考えている学習者も多くいる。

しかし、四声の影響から、「第 1 声＋第 4 声」の組み合わせは著しい下がり目があるものの、平板型で発音する学習者が多い。母語の影響はいったいどの程度存在しているのかまだ疑問がある。

対して、二年生 3 人、三年生 3 人、四年生 2 人は「頭高型」で正しく発音していた。事前アンケート調査とフォローアップインタビューによると、4 人は「普段よく日本語のアニメーションやテレビ番組を見ている」と答えた。

最後に、学習レベルがあがっても、アクセントの習得はなかなかできないとみられる。アクセントに関する知識が身についたとしても、外国人学習者にとってアクセントは単語一つずつ覚えなければならないものなのであろう。

6.2.2. 「体力」（頭高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「体力」のアクセント型は「頭高型」である。中国語の“体力”と意味と字形はほぼ同じである。中国語の声調は「第3声＋第4声」である。先行研究では、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べられており、予備調査でもそういう傾向が見られた。

図 20 は「体力」の発音状況を示している。

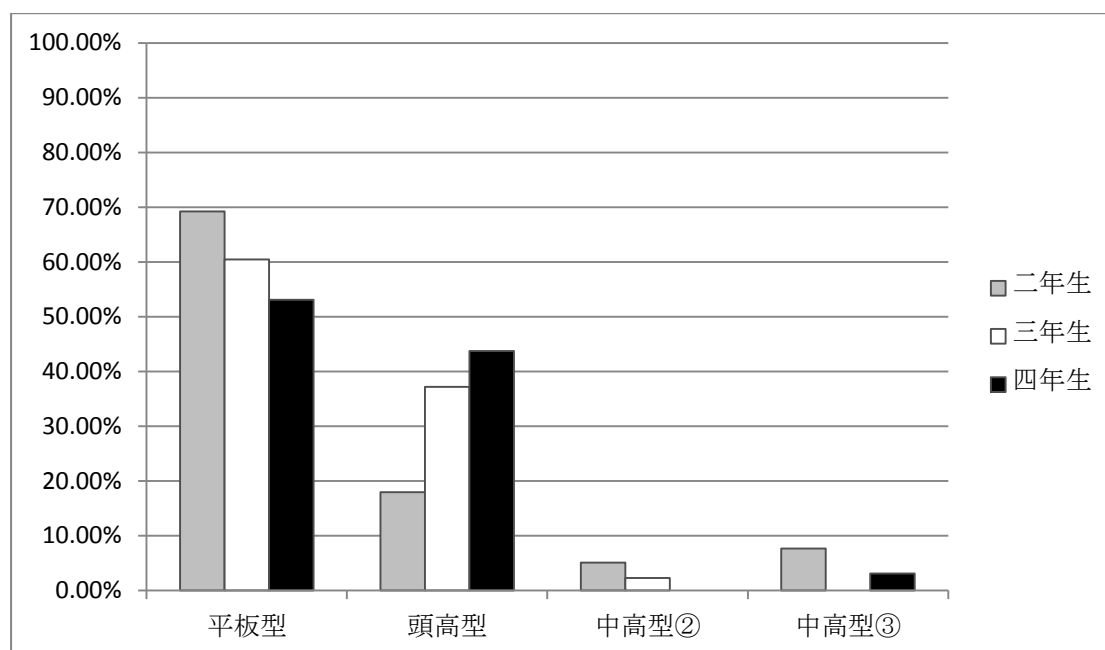


図 20 二字漢語「体力」の発音状況

図 20 の示すように、「体力」を「平板型」で発音した学習者の数が多いが、前記の「催促」と比べると、「頭高型」で正しく発音できた学習者は少なくない。二年生は 7 人、三年生は 16 人、四年生は 14 人が頭高型で発音できていた。フォローアップインタビューによると、「体力」は学習者がときどき使う単語であり、正確なアクセントが身につくことが当然であると考えられる。また、「～力」のような言葉を大量に勉強させるため、すでに習得した言葉からアクセントを推測することも可能である。

さらに、「体力」は中国語の声調が「第3声＋第4声」で、「ㄣˇ ㄣˋ」のように発音するが、実際に発音するとき、あまり上がり目・下がり目がなく、一気に下降調で発音

するのが自然だとされている。そのため、「頭高型」で発音できるのも当然であろう。

そして、[a]+[i]（二重母音）の組み合わせ「体」があるので、直観に頼って「頭高型」で発音する学習者もいる。フォローアップインタビュー結果でもそういう傾向が多少みられた。

しかし、二年生 27 人、三年生 26 人、四年生 17 人は「平板型」で発音した。前記の分析と同じように、見慣れない単語を「平板型」で発音するのが無難であると考えた学習者が多くいると思われる。

学習レベルが上がるにつれて、「体力」の正しいアクセントを習得した学習者が多くなる。そのため、教師が単語を教えるとき、品詞分類や使い方のみ強調するだけではなく、一つ一つのアクセントを暗記させることも重要であると考えられる。

6.2.3. 「歳月」（頭高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「歳月」のアクセント型は「頭高型」である。中国語には字形が異なって、意味が一致している二字詞「岁月（suì yuè）」があり、声調は「第 4 声 + 第 4 声」である。先行研究では、学習者が第 4 声で発音する漢字を「頭高型」で発音してしまう傾向があると述べられているが、予備調査ではほとんど見られなかった。

図 21 は「歳月」の発音状況を示している。

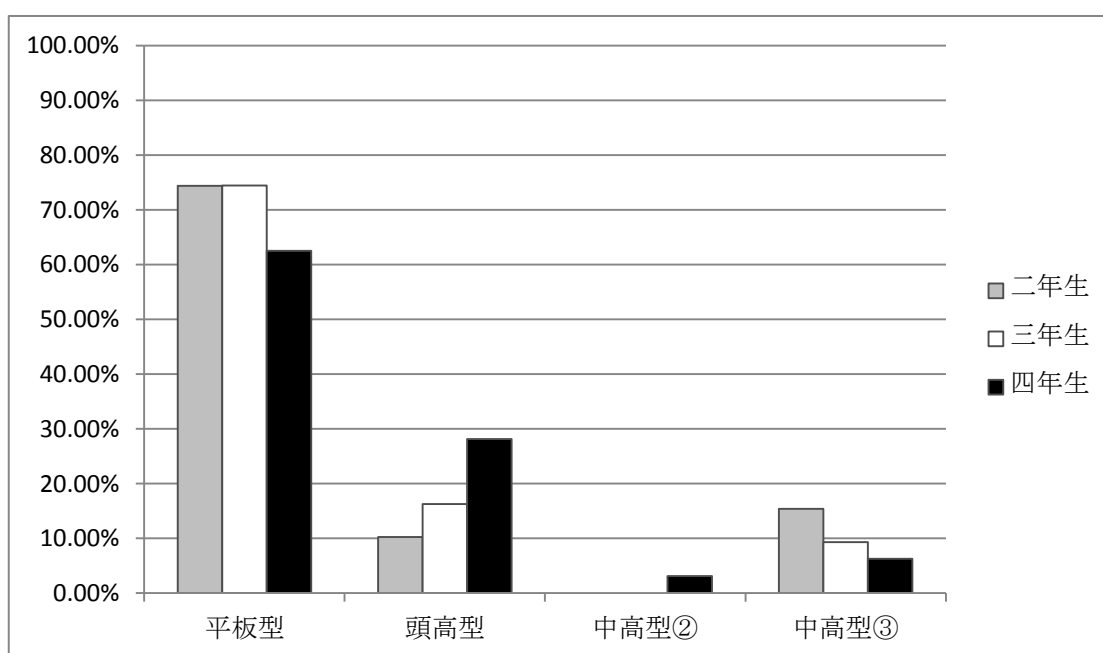


図 21 二字漢語「歲月」の発音状況

図 21 の示すように、「平板型」で発音した学習者の数が圧倒的に多い。二年生は 29 人 (74.36%)、三年生は 32 人 (74.42%)、四年生は 20 人 (62.50%) が平板型で発音している。フォローアップインタビューの結果からみると、「歲月」という単語の既知度は低く、「頭高型」で正しく発音することが難しいと思われる。

それに対して、「頭高型」で正しく発音した学習者も少なくない。二年生は 4 人、三年生は 7 人、四年生は 9 人が頭高型で発音した。「歲月」は中国語の声調が「第 4 声 + 第 4 声」で、「ㄣ ㄣ」のように発音する。フォローアップインタビューの結果、「歲月」は既知度が低い語彙に属しているが、下がり目が激しく、一気に下降調で発音するのが自然だとみられるため、「頭高型」で発音してしまうのも当然であろう。

そして、[a]+[i] (二重母音) の組み合わせ「歳」があるので、直観に頼って「頭高型」で発音する学習者がいる。フォローアップインタビュー結果でもそういう傾向が多少みられた。

6.2.4. 「快樂」 (頭高型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「快樂」のアクセント型は「頭高型」である。中国語の“快乐”と比べて、字形が若干異なっているが、意味はほぼ同じである。中国語の声調は「第 4 声 + 第 4 声」である。先行研究は学習者が第 4 声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、予備調査ではそういう傾向は見られなかった。

図 22 は「快樂」の発音状況を示している。

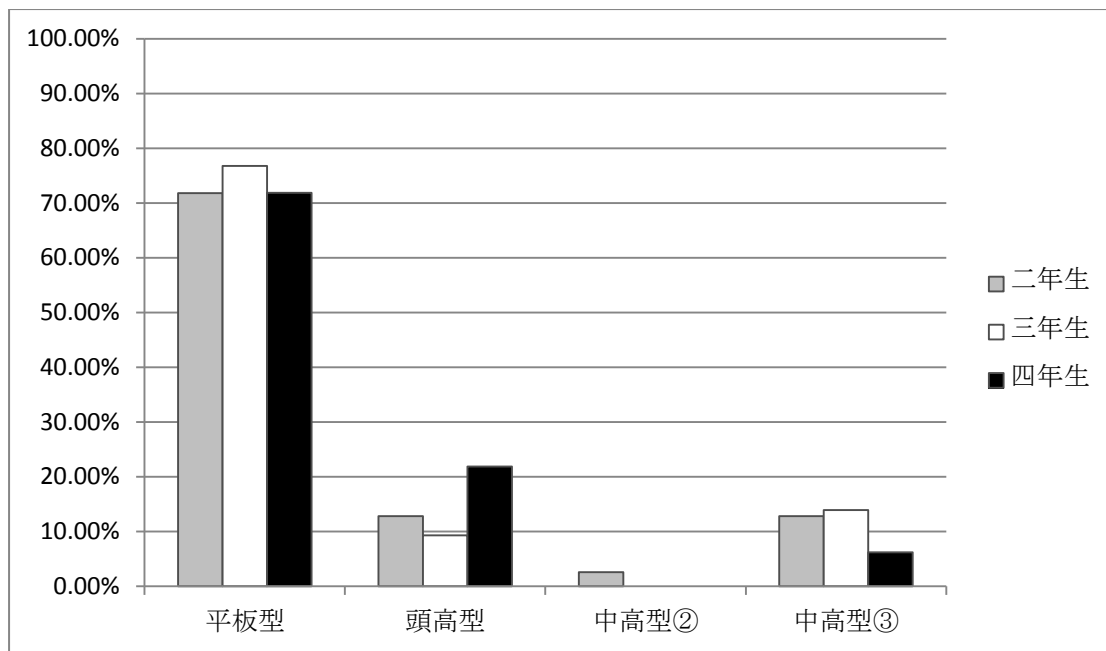


図 22 二字漢語「快樂」の発音状況

図 22 の示すように、「快樂」も「平板型」で発音した学習者の数が最も多く、二年生 28 人 (71.79%)、三年生 33 人 (76.75%)、四年生 23 人 (71.88%) が「平板型」で発音している。予備調査でも、調査対象者 10 人全員が「平板型」で発音した。まず、「快樂」は中国語の声調が「第 4 声+第 4 声」で、「ㄣ ㄣ」のように発音するが、学習者はほぼ声調からの影響を受けず、「直観に頼って」平板型で発音している。フォローアップインタビューによると、「快樂」という語彙は学習者があまり使わない単語であり、見たこともほとんどないと述べている。そのため、「既知度がかなり低い単語を平板型で発音するのは一番無難な選択である」と考えている学習者が多くいるのであろう。

「頭高型」で発音した学習者は少ないが、二年生 5 人 (12.82%)、三年生 4 人 (9.30%)、四年生 7 人 (21.88%) がいる。その中に、[a]+[i] (二重母音) の組み合わせ「快」があるので自然と「頭高型」で発音する学習者がいるが、「ドラマやアニメーションから聞いたことがあるので、役者 (声優) のアクセントを真似して発音した」と答えている学習者が 6 人いる。6 人の学習者とも成績は優れており、授業時間以外の学習時間が長いと答えた。外国人学習者にとって、アクセントの習得はなかなか自力で到達できないことであるが、ビデオ教材などを用いて、一定の学習時間を費やせば、よりよい結果が得られると考えられる。

最後に、中高型② (アクセントの核は二番目の拍「い」) で発音した学習者が 1 人、中高型③ (アクセントの核は三番目の拍「ら」) で発音した学習者が 14 人いる。とくに四拍の二字漢語を中高型③で発音するのは誤りであるが、このように発音した学習者は

数が少なくない。前記の語彙にも同じ現象がみられるので、今後その点に注目しなければならないと考える。

6.2.5. 「背景」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「背景」のアクセント型は「平板型」である。中国語には同じ字形・意味の二字詞「背景」（bèi jǐng）がある。声調は「第4声+第3声」であり、「ㄣˇㄣˇ」のように発音する。先行研究によると、学習者は第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べており、本調査では「頭高型」で発音する学習者がいると推測される。

図 23 は「背景」の発音状況を示している。

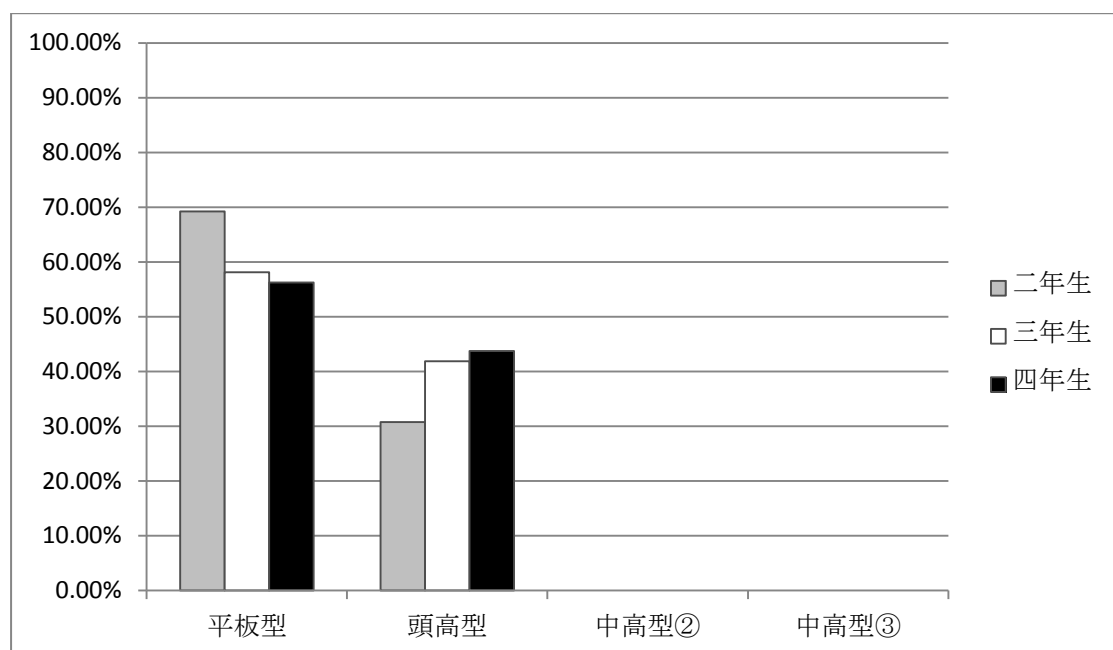


図 23 二字漢語「背景」の発音状況

図 23 に示すように、「背景」を「平板型」で発音した学習者の数が多いが（二年生 27 人（69.23%）、三年生 25 人（58.14%）、四年生 18 人（56.25%））、頭高型で発音した学習者（二年生 12 人（30.77%）、三年生 18 人（41.86%）、四年生 14 人（43.75%））も少なくない。それに対して、「中高型」を選ぶのは一例もない。

声調の影響からみると、「背景」の声調が「第4声+第3声」であることがわかる。先行研究によると、頭文字が第4声で、勢いよく頭高型で発音する可能性があると考えられる。またフォローアップインタビューの結果でも、「母語の声調によって「背景」のアクセ

ントを判断する」と答えた学習者は10名で、かなり高い数値であると考えられる。つまり、「背景」は「声調から日本語のアクセントを判断する」語彙であるといえる。

しかし、既知度調査によると、「背景」は学習者がよく使う単語である。そのため、正確なアクセントを習得して「平板型」で発音する学習者がもっとも多いのは当然のことであると考えられる。

さらに、「背景」が[a]+[i]（二重母音）の単語であるので、「思わず上がり目や下がり目が出て発音する」と答えた学習者もいる。母語の影響を受けて、切れ目なく一音節で発音するということであろう。

6.2.6. 「退会」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「退会」のアクセント型は「平板型」である。中国語には同じ字形・意味の二字詞「退会」（tu ihu）がある。声調は「第4声+第4声」であり、「ㄣㄣ」のように発音する。先行研究によると、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べており、本調査では「頭高型」で発音する学習者がいるとみられる。

図24は「退会」の発音状況を示している。

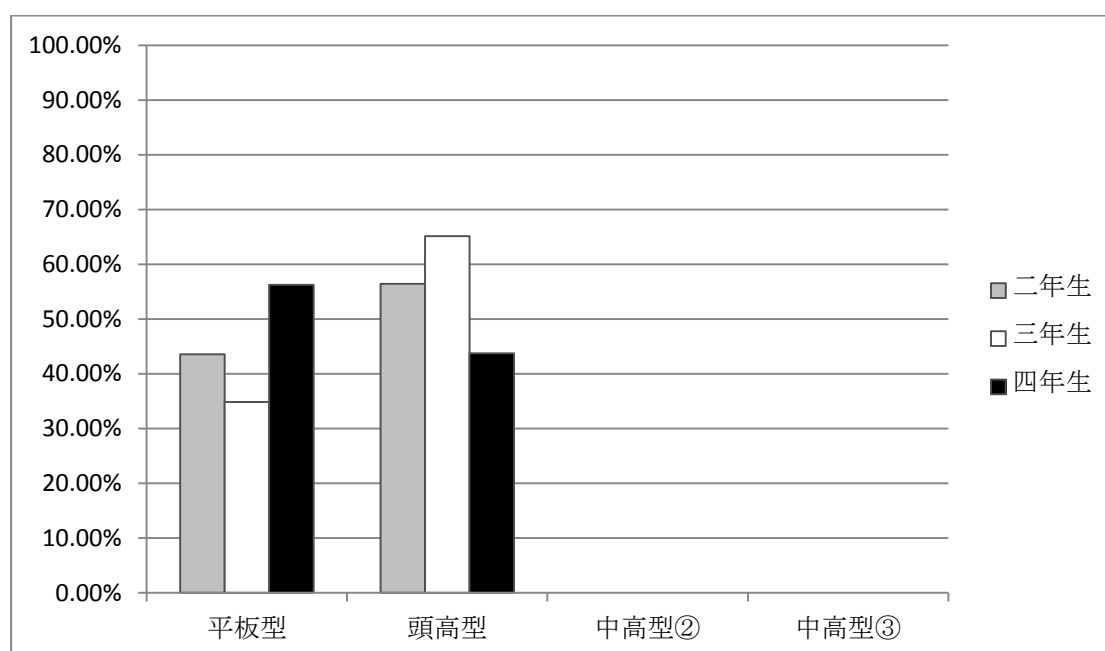


図24 二字漢語「退会」の発音状況

図 24 の示すように、「退会」を頭高型で発音した学習者の数が多いが（二年生 22 人（56.41%）、三年生 28 人（65.12%）、四年生 14 人（43.75%））、平板型で発音した学習者（二年生 17 人（43.59%）、三年生 15 人（34.88%）、四年生 18 人（56.25%））も少なくない。それに対して、「中高型」を選んだ例は一例もない。

“退会”の声調は「第 4 声+第 4 声」である。先行研究から推測すると、2 つの漢字が第 4 声なので、一気に頭高型で発音する可能性があると考ええる。またフォローアップインタビューの結果は、「あまり見たことのない単語であるため、母語の声調によって「退会」のアクセントを判断する」と答えた学習者が 17 名おり、非常に多い人数であると考えられる。つまり、「退会」も「声調によって日本語のアクセントを判断する」語彙であるといえる。

また、すでに学習した「大会」などの語彙のアクセントから類推して、「高低」のように発音する学習者もいた。さらに、[a]+[i]（二重母音）の単語であるので、「思わず上がり目や下がり目が出て発音する」と答えた学習者もいた。

6.2.7. 「体格」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「体格」のアクセント型は「平板型」である。中国語の“体格（tǐ gé）”とは、意味と字形がほぼ同じである。中国語の声調は「第 3 声+第 2 声」である。先行研究では、学習者が第 2 声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べられており、本調査でもそういう傾向が見られた。

図 25 は「体格」の発音状況を示している。

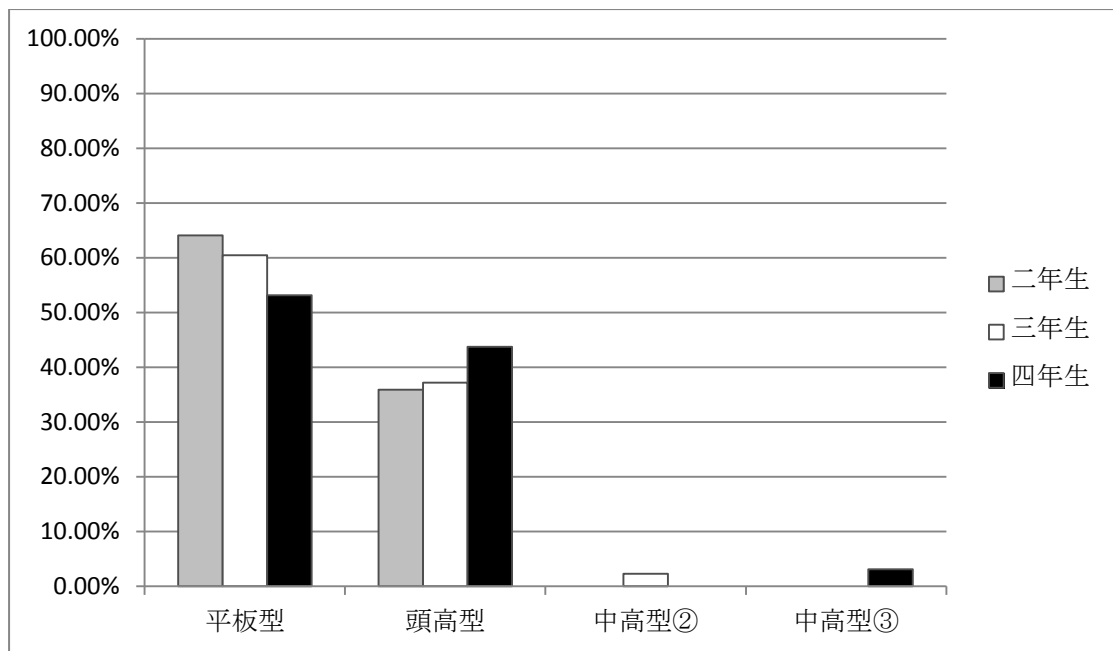


図 25 二字漢語「体格」の発音状況

図 25 の示すように、「体格」を平板型で発音した学習者の数がもっとも多いが、頭高型で発音した学習者も少なくない。二年生は 14 人 (35.90%)、三年生は 16 人

(37.21%)、四年生は 14 人 (43.75%) が頭高型で発音した。既知度がやや低い単語であるが、「体力」「体育」などのすでに習得した単語から類推して発音した学習者が多い。そして、[a]+[i] (二重母音) の組み合わせ「体 (たい)」があるので、頭高型で発音する学習者がいる。フォローアップインタビューの結果でもそういう傾向が多少みられた。

6.2.8. 「墜落」 (平板型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「墜落」のアクセント型は「平板型」である。中国語には字形と意味がほぼ同じ二字詞「墜落 (zhuì luò)」があり、声調は「第 4 声 + 第 4 声」である。本調査では「平板型」で発音する学習者の数が多いとみられる。

図 26 は「墜落」の発音状況を示している。

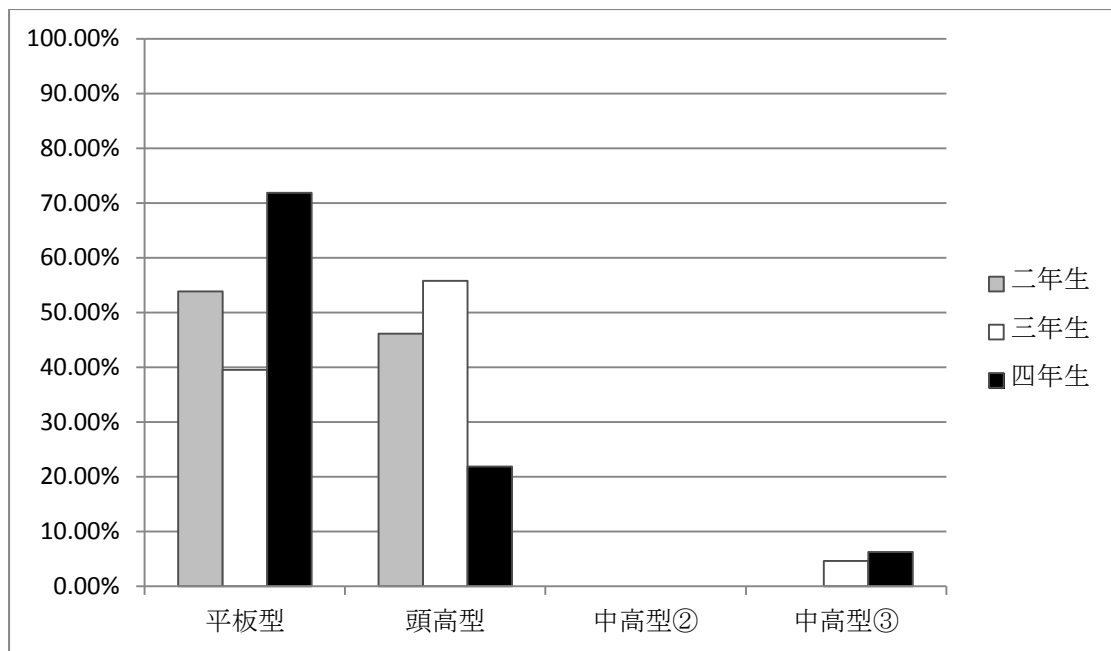


図 26 二字漢語「墜落」の発音状況

図 26 からみると、「墜落」を「平板型」で発音した学習者の数がもっとも多い。二年生は 21 人（53.85%）、三年生は 17 人（39.53%）、四年生は 23 人（71.88%）が平板型で発音している。一方、「頭高型」で発音した学習者も多く、二年生 18 人（46.15%）、三年生 24 人（55.81%）、四年生 7 人（21.87%）いる。

フォローアップインタビューによると、「墜落」は学習者があまり使わない単語である。中国語の声調は「第 4 声＋第 4 声」、「↘↘」のように発音する。

「平板型」で発音すべき言葉を「頭高型」で発音する理由は、以下のように考えている。四声の影響で、「第 4 声＋第 4 声」の組み合わせは著しい下がり目があるので、頭高型で発音する学習者が多いと考えられる。また「二重母音」の「墜（つい）」があるため、一気に下降調で発音した学習者もかなり多くいるであろう。

6.2.9. 「圧力」（中高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「圧力」のアクセント型は「中高型②」である。中国語には字形が少し違っているが（「圧」と“压”）、意味がほぼ一致している「圧力（yā lì）」がある。中国語の声調は「第 1 声＋第 4 声」であり、

「→↘」のように発音する。先行研究によると、学習者は第 4 声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、予備調査では「中高型」や「平板型」で発音した学習者のほうが多かった。

図 27 は「圧力」の発音状況を示している。

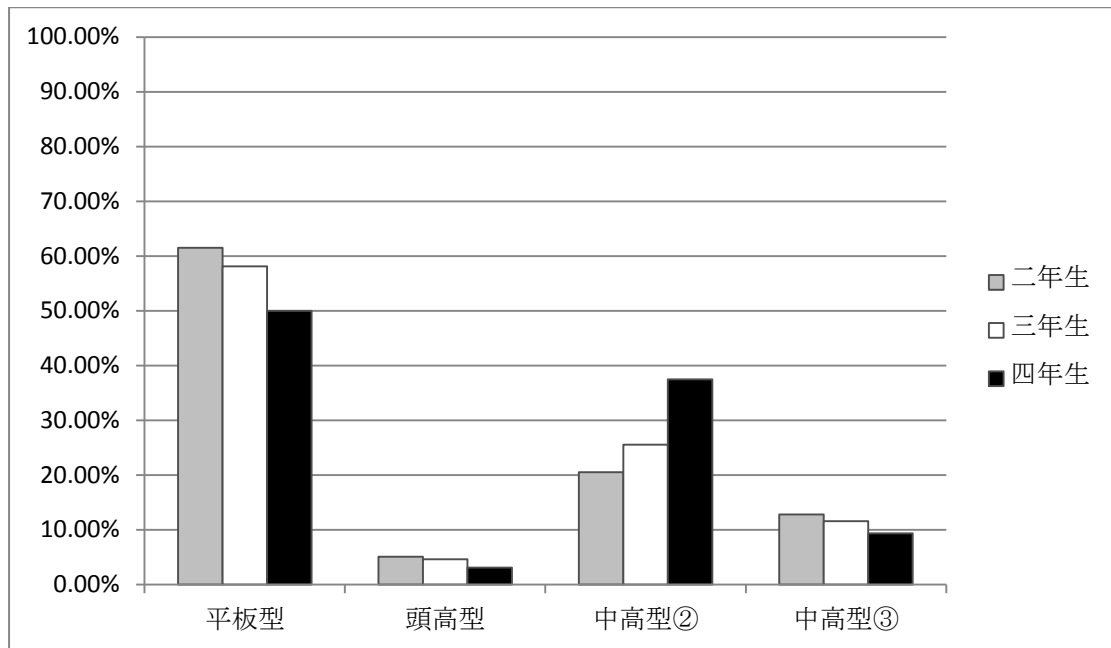


図 27 二字漢語「圧力」の発音状況

図 27 が示すように、「圧力」を「平板型」で発音した学習者の数がもっとも多く、二年生 24 人（61.54%）、三年生 25 人（58.14%）、四年生 16 人（50.00%）であった。中高型②（アクセント核は二番目の拍「つ」）で発音した学習者も多く、二年生 8 人（20.51%）、三年生 11 人（25.59%）、四年生 12 人（37.50%）いた。そして、中高型③（アクセント核は三番目の拍「りょ」）で発音した学習者は二年生 5 人（12.82%）、三年生 5 人（11.62%）、四年生 3 人（9.37%）である。数多くの学習者が「平板型」を選んでいるが、「中高型②」で正しく発音した学習者も少なくない。

フォローアップインタビューによると、「圧力」という言葉は既知度が高いとみられる。そのため、使用語彙としての「圧力」を正確なアクセントで覚えているのは不思議ではない。また、「圧力」のアクセントは知らないが、「引力」「権力」などのように「力」を下降調で発音するのが正解であろうと考える学習者もいる。

声調については、“圧力”の声調が「第 1 声＋第 4 声」で、「→↘」のように発音するため、四声の影響を受けて「圧力」の「力」を下降調で発音すると答えた学習者が 2 人いる。声調の影響がみられるが、ごく一部のみの言葉に限定されるので、より深く研究する必要があると考えられる。

6.2.10. 「色彩」（平板型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「色彩」のアクセント型は「平板型」である。中国語には字形と意味が同じ二字詞「色彩（sè cǎi）」があり、声調は「第4声＋第3声」である。先行研究では、学習者が第2声で発音する漢字を「頭高型」で発音してしまう傾向があると述べられているが、本調査ではそういう傾向は見られず、むしろ「中高型」で発音した学習者の数が多かった。

図 28 は「色彩」の発音状況を示している。

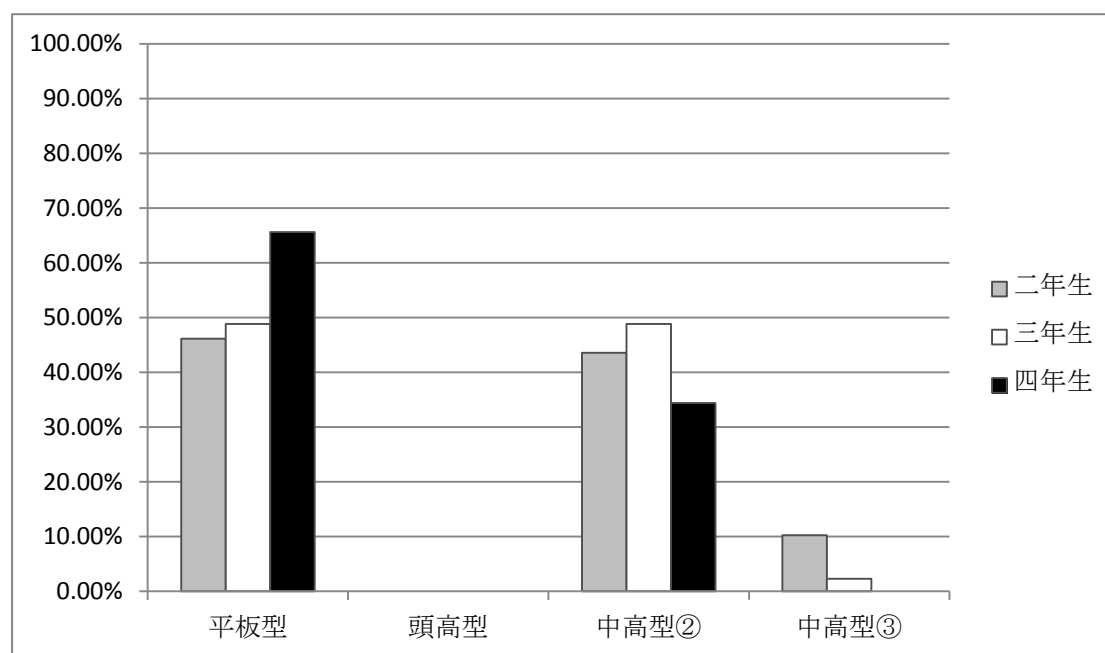


図 28 二字漢語「色彩」の発音状況

図 28 のように、「色彩」を平板型で発音した学習者の数が多い、二年生は 18 人（46.16%）、三年生は 21 人（48.84%）、四年生は 21 人（65.63%）が平板型で発音している。学習歴が長くなっても、発音状況はあまりかわらないようである。

多くの調査対象者は「平板型」で正しく発音した。その理由については、あまり使わない単語で「とりあえず平板型で発音する」と答えた学習者が多い。また四声からの影響から見れば、「第4声＋第3声」が頭高型と似ているが、頭高型で発音した学習者はいなかったの、四声の影響がほとんどないと思われる。

それに対して、二年生 17 人、三年生 21 人、四年生 17 人は中高型②（アクセント核は二番目の拍「き」）で発音した。さらに、[a]+[i]（二重母音）の「彩（さい）」があるため、一気に下降調で発音した学習者もかなり多くいる。

6.2.11. 「内閣」 (頭高型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「内閣」のアクセント型は「頭高型」である。中国語の“内閣”と比べて、「閣」の字形が若干異なっているが、意味は同じである。中国語の声調は「第4声+第2声」であり、「ㄣˋ ㄋㄚˊ」のように発音する。先行研究によると、学習者が第4声・第2声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べており、予備調査でも多少そういう傾向が見られた。

図 29 は「内閣」の発音状況を示している。

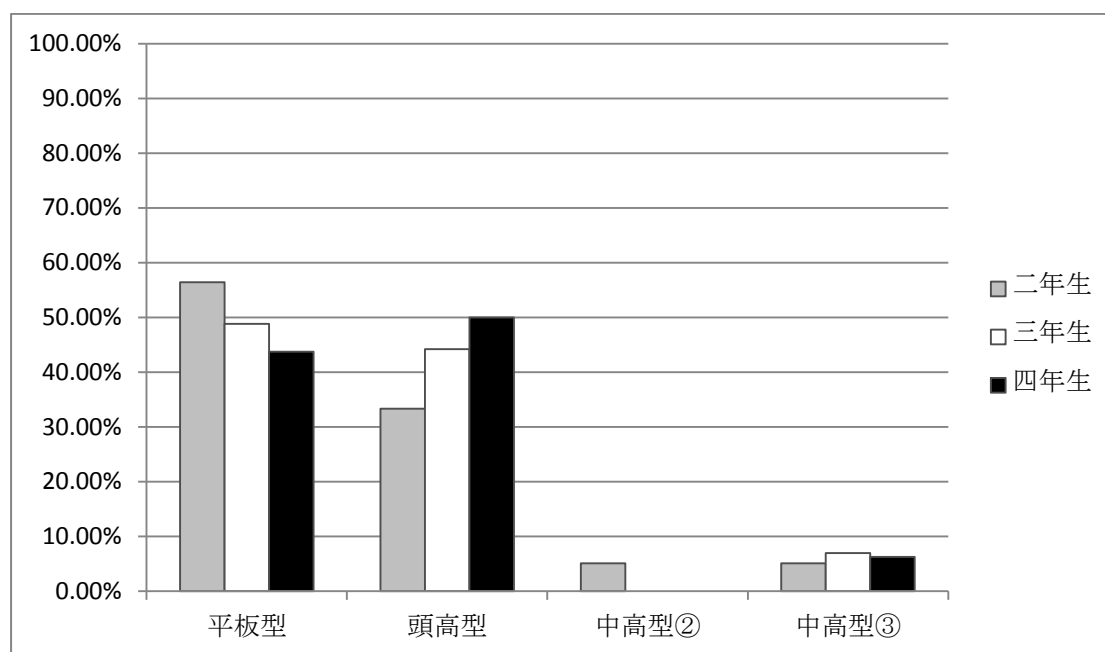


図 29 二字漢語「内閣」の発音状況

図 29 の示すように、「内閣」を「平板型」で発音した学習者の数が多いが、二年生 22 人 (56.41%)、三年生 21 人 (48.84%)、四年生 14 人 (43.75%)、頭高型で発音した学習者二年生 13 人 (33.33%)、三年生 19 人 (44.19%)、四年生 16 人 (50.00%) も少なくない。特に四年生には「頭高型」を選んだ学習者が平板型より多い。予備調査でも「頭高型」で発音した調査対象者が 3 人いる。ほかの四つの頭高型の語彙と比べて、「内閣」の正答率はかなり高い。筆者は四つの視点から分析して、以下の理由があると考えた。

まず、声調の影響からみると、“内閣”の声調は「第4声+第2声」で、「ㄣˋ ㄋㄚˊ」のように発音する。前記のとおり、先行研究では第4声・第2声を含む単語を頭高型で発音する傾向があると推測されているため、四声の影響を受けて「内閣」を頭高型で発音する可能性があると考えられる。しかし、前例を踏まえ、ほぼ声調からの影響を受けず、

「直観」に頼って発音する例がかなり多くある。またフォローアップインタビューの結果にも、「母語の声調によって「内閣」のアクセントを判断する」と答えた学習者は1名しかいない。そのため、「声調の影響を受けて日本語のアクセントを判断する」という仮説が有力ではないと考えられる。

また、「内閣」という語彙は学習者があまり使わない単語であるが、テキストやビデオ教材などよく現れる単語であると思われる。教材で頻繁に出現する単語であるため、自然にアクセントを習得できると考えられる。

さらに、前例と同じく、「内閣」にも[a]+[i]（二重母音）の組み合わせ「内」があるので、自然と上がり目や下がり目が出て発音する学習者がいる。「頭高型」で正しく発音した学習者だけではなく、「中高型」で発音する学習者も「ない」のところで音調の変化が現れる。中国語には二重母音が数多く存在しているため、学習者にとって「子音＋母音」の組み合わせも一音節であると考えてよいであろう。

最後に、フォローアップインタビューによると、一部分の学習者は「否定の意味を表す「ない」はすでに初級のときに学習したので、意味はともかく、「ない」という組み合わせをみると反射的に下降調で読みたくなる」と答えた。11番の単語「一目」でも同じ答えが出ており、この点についてより深く分析する必要があると考える。

6.2.12. 「室内」（中高型）

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「室内」のアクセント型は「中高型②」である。中国語には字形・意味がほぼ一致している“室内（shì nèi）”がある。中国語の声調は「第4声＋第4声」であり、「ㄣ ㄣ」のように発音する。先行研究によると、学習者が第4声で発音する漢字を「頭高型」で発音する傾向があると述べているが、予備調査では「中高型」や「平板型」で正しく発音した学習者のほうが多かった。

図30は「室内」の発音状況を示している。

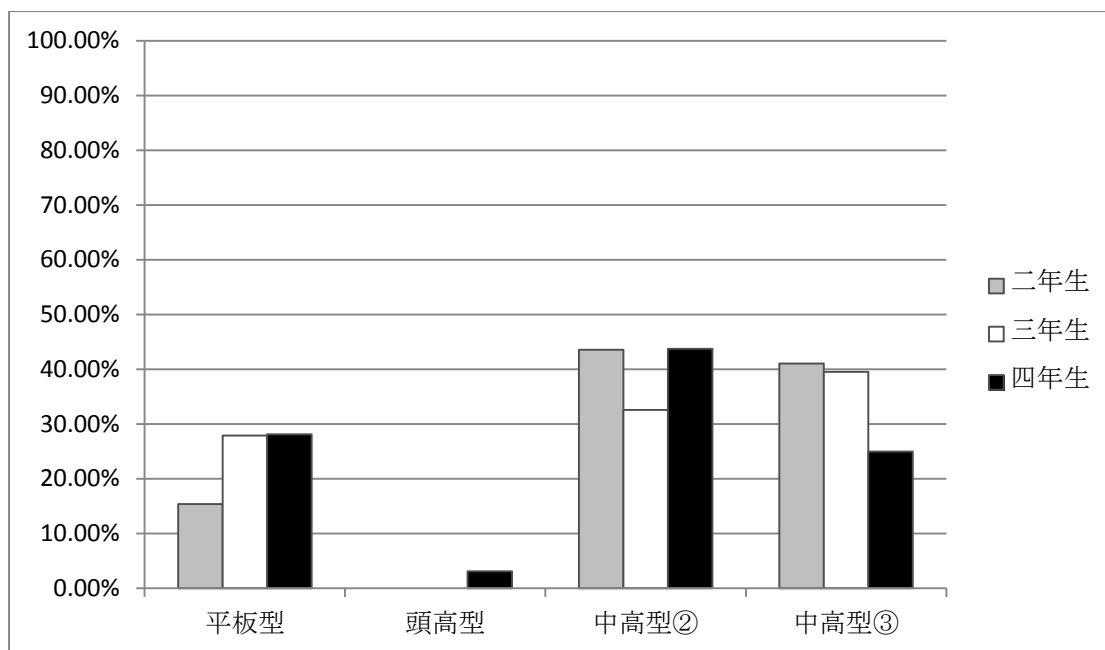


図 30 二字漢語「室内」の発音状況

図 30 の示すように、「起伏式」で発音した学習者が多い。中高型②（アクセント核は二番目の拍「つ」）で発音した学習者は二年生 17 人（43.59%）、三年生 14 人（32.56%）、四年生 14 人（43.75%）である。それから、中高型③（アクセント核は三番目の拍「な」）で発音した学習者は二年生 16 人（41.03%）、三年生 17 人（39.53%）、四年生 8 人（25.00%）である。ほかの単語と比べて、「室内」の正答率はかなり高いとみられる。フォローアップインタビューによると、「室内」は学習者の使用語彙ではないとみられるが、平板型より中高型で発音する理由を以下の観点から分析してみた。

まず、声調の影響からみると、“室内”の声調が「第 4 声＋第 4 声」で、「ㄣ ㄣ」のように発音する。前記のとおり、先行研究では第 4 声・第 2 声を含む単語を頭高型で発音する傾向があると推測しているが、四声の影響を受けて頭高型で発音する学習者が 1 人しかいなかったため、声調の影響はその要因ではないと考えられる。

また、「室内」にも[a]+[i]（二重母音）の組み合わせ「内（ない）」があるので、自然と上がり目や下がり目が出て発音する学習者がいる。中国語には二重母音が多く存在しているため、学習者にとって一音節であると考えてよいであろう。

さらに、「内閣」と同じく、一部の学習者は「否定の意味を表す「ない」がすでに初級のときに学習したので、意味はともかく、「ない」という組み合わせをみると反射的に下降調で読みたい」と答えた。

ちなみに、アクセント核を3番目の拍に置いた学習者がかなりいるとみられる。おそらく東京式アクセントに関する知識がまだ身についていない、あるいは中高型②で発音しようとしたが、母語話者から聞くと中高型③になってしまうのではないかと推測する。

6.2.13. 「独裁」(平板型)

『NHK 日本語アクセント辞典』によると、二字漢語「独裁」のアクセント型は「平板型」である。中国語には字形と意味が同じ二字詞「独裁(dú cá)」があり、声調は「第2声+第2声」である。先行研究では、学習者が第2声で発音する漢字を「頭高型」で発音してしまう傾向があると述べられているが、予備調査ではそういう傾向は見られなかったことから、むしろ「平板型」で発音する学習者の数が多いと考えられる。

図31は「独裁」の発音状況を示している。

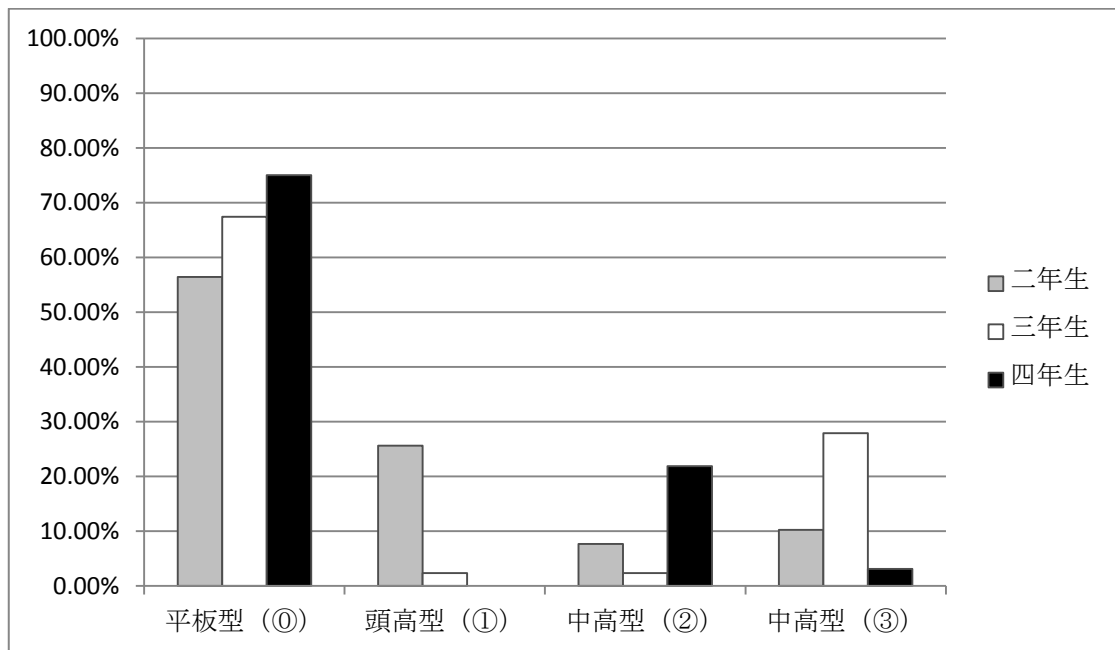


図31 二字漢語「独裁」の発音状況

図31のように、「独裁」を「平板型」で発音した学習者の数が多いとみられる。二年生は22人(56.41%)、三年生は29人(67.44%)、四年生は24人(75.00%)が平板型で発音している。学習歴が長くなって、緩やかに平板型に進行している。フォローアップインタビューによると、「独裁」も学習者があまり使わない単語である。中国語の声調は「第2声+第2声」、「ㄉㄨˊ ㄘㄚˊ」のように発音する。

多くの調査対象者は「平板型」で正しく発音できていた。その理由については、フォローアップインタビューによると、「とりあえず平板型で発音する」学習者が多いから

のようである。また四声の影響から見れば、「第2声+第2声」の上昇調は平板型と似ているので、平板型と推測する学習者も多い。この点は先行研究の推論と一致しない。

一方、中高型③（アクセント核は三番目の拍「さ」）で発音した学生がいる。もちろん「低低高低」という型はそもそも東京式アクセントではなく、学習者の誤りであるが、予備調査でも学習者がアクセント核を[a]+[i]のところで置く例が大量にあったため、「独裁」のアクセント核を三拍目の「さ」に置く理由も同じであろう。

7. まとめ

これまでの外国人学習者に関する日本語アクセント習得の研究は、おもに学習者の知覚能力、あるいは発音の傾向などというように、一方向の視点から母語の影響を指摘しながら論じられてきた。母語干渉の視点から、さまざまな先行研究では声調の日本語アクセントへの影響についてはすでにある程度の説明がなされているが、学習者の学習実態に触れた研究は管見の限りで存在しなかった。そのため、本研究は調査対象後の語種を二字漢語のみに限定しアクセントの産出状況を考察し、中国語の声調と日本語の漢語アクセントとの間で音韻転移が起こるかどうかについて、明らかにすることができた。

本研究の結論を以下のようにまとめた。

(1) 平板型の出現率が圧倒的に高い。塩田（2016）または坂本（1999）によると、4拍の二字漢語には平板型の語群がもっとも多い。先行研究と同じく、学習者が一番使っているアクセント型は平板型である。

(2) 平板型を選ぶ理由はいくつかあるが、最も多い理由は「なんとなく」「特に理由はない」「とりあえず平板型で発音する」などである。とくに既知度が低い単語については、辞書を調べなければ正しいアクセントを習得できないため、安易に「すべて知らない単語を平板型で発音すれば無難だ」と考えている学習者が多くいるのは問題である。

(3) 音読みが「二重母音」漢字では、切れ目なく一気に発音して、上がり目や下がり目が出やすいとみられる。最も代表的な例は「[a]+[i]」の組み合わせである。つまり、音読みが「二重母音」の漢字の前後でアクセント核がでやすいと考えられる。その理由として、中国語には二重母音が多く存在しており、また漢字一文字が一音節であるため、二重母音も一音節であると考えている学習者が多いであろう。それに対して、そうではない二字漢語の場合では、漢字一文字を一音節とするより、はっきりと四拍で発音するのが自然である。「拍」に関する意識がまだ薄いと言えるだろう。

(4) 学習レベルが上がるにつれて、アクセントの誤りも減少していくという傾向はほとんど見られない。とくに、本調査では二字漢語を「-2型（中高型③）」（アクセント核は三番目の拍）で発音した学習者が一定数おり、四年生になっても多く存在しているとみられる。その理由は、東京式アクセントに関する知識まだ身についていない、あるいは「中高型②」で発音しようとしても、母語話者から聞くと「中高型③」に聞こえる可能性も非常に高いと考えられる。この点についてより深く分析する必要がある。

(5) 学習者はすでに学習した語彙のアクセント型から、同じグループに属する新しい単語のアクセント型を推測するという方法を使っているようである。つまり、学習者にとって既知度が低い単語のアクセントは、それまでに習った語彙（または単漢字）から判断する。むしろ既知の日本語から、「未知」の日本語を推測するほうが、学習者にとってより信頼性が高い方法であろう。

(6) 声調の影響は弱い。本調査では、「退会」と「背景」2語のみ声調の影響がみられた。それに対して、(2)「すべての知らない単語を平板型で発音する」や(5)「既知の日本語から、「未知」の日本語を推測する」方法のほうが優先順位が高いと考えられる。

(7) 先行研究で述べられているように、アクセントは「自力ではなかなか知り得ない学習ポイント」であり、学習者が教師側の指導（ネイティブの指摘）なしに、間違いに気づくことが難しいポイントである。実際には外国人学習者は語ごとにアクセントを覚えなければならない。とくに初級段階では、教師が単語を教えるとき、品詞分類や使い方のみを強調するだけではなく、一つ一つのアクセントを暗記させることが不可欠であると考えられる。また「ドラマやアニメーションから聞いたことがあるので、役者（声優）のアクセントを真似して発音した」と答えている正答率が高い学習者がいるので、ビデオ教材などを用いて、一定の学習時間をかければ、よりよい結果が得られると考えられる。

8. 今後の課題

本研究では中国国内の日本語学習者の日中同形二字漢語アクセントの産出について調査を実施し、様々な視点から分析を行った。ここで、本研究で示された今後の課題について述べる。

(1) 本研究では、音読みが二重母音の漢字について、切れ目なく一気に発音して、上がり目や下がり目が出やすいという結論が得られたが、今回用いた単語の数は少ないため、まだ再検証する余地があると思う。特殊拍を含めて、学習者の「音素的音節」と「モーラの音節」へ知覚についてさらに検討する必要があると考えられる。

(2) アクセント核の問題について、より詳しく分析する必要があると思う。個々の学習者の音声のピッチレンジなどを観察し、より客観的な結果を得るべきであると考えられる。

<参考文献>

- 鮎澤孝子（2003）「外国人学習者の日本語アクセント・イントネーション習得」『音声研究』7,pp.47-58.
- 魚返善雄（1942）『支那語の発音と記号』三省堂.
- 侯銳（2005）「日本語アクセントと中国語声調の比較—日本語話者の中国語声調問題をめぐって—」『新潟経営大学紀要』11,新潟経営大学,pp.137-145.
- 塩田雄太（2016）「漢語アクセントの現況—変化の「背景」を探る—」『放送研究と調査』12,NHK 放送文化研究所,pp.64-85.
- 朱春躍（1993）「中国語話者の日本語アクセントの習得—その特徴と指導上の問題点をめぐって—」『国際化する日本語—話し言葉の科学と音声教育』1993 第7回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編,pp.179-184.
- 陶俊（2017）「中国人日本語学習者のアクセント・イントネーション理解力が発音運用能力に及ぼす影響」『言語文化共同研究プロジェクト 2016』,大阪大学大学院言語文化研究科,pp.49-59.
- 西郡仁朗・八山京子（1997）「北京語母語話者による東京語アクセントの聞き取りの習得—日本語学習初級段階における詳説と練習の結果—」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」平成8年度研究成果報告書,pp.81-88.
- 楊立明（1993）「中国語話者の日本語述部の韻律に見られる母語の干渉」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1班平成4年度成果報告書,pp.103-113.
- 李墨彤（2015）「中国語母語話者による日本語漢語アクセントの生成について—過剰生成と母語転移を中心に—」日本音声学会 2015 年度（第 29 回）全国大会発表要旨
- 柳悦（2009）「中国人日本語学習者の複合名詞アクセント習得の縦断的研究—知識・発音・知覚の比較を中心に—」首都大学東京大学院人文科学研究科日本語教育学博士論文.
- 劉志偉（2017）「新しい日本語教育のアクセント学習において必要なもの—中国人日本語学習者の＜学習メモ＞の分析から—」『言語の研究』3,首都大学東京言語研究会,pp.31-43.

<参考辞書>

呂叔湘・丁声樹・他編（1978）『現代漢語辞典』第1版,商務印書館.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（2007）『言語学大辞典 6 術語編』,三省堂.

金田一春彦（1998）『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』,日本放送協会放送文化研究所.

中島平三（2005）『言語の事典』,朝倉書店.

謝辞

修士論文を作成する過程において私を指導し、助けていただいた方々に心から感謝の意を申し上げたいと思います。

本研究を遂行し修士論文の執筆にあたり、研究方法から、研究内容、展開に至るまで熱心にご指導を賜りました浅川哲也教授に深く感謝申し上げます。音声学におきましては、分析方法など、細部にわたるご指導を頂きました西郡仁朗教授に感謝の意を表します。

そして、論文の音声データ調査にご協力いただきました陳愛華先生・周璞先生と御修正頂きました佐藤桐子先輩に感謝いたします。

最後に、いつも私を支えてくれた家族に深く感謝します。

修正対応表

| 番号 | ページ | 行 | 【誤】 | 【正】 |
|----|-----|----|--------------------|--------------------|
| 1 | 1 | 1 | 目録 | 目次 |
| 2 | 4 | 8 | 二字漢語のアクセントの現況は | 二字漢語のアクセントの現況を |
| 3 | 5 | 17 | 日本語アクセントの生成 | 日本語アクセントの産出 |
| 4 | 5 | 21 | 起こりやすいことなどが | 起こりやすいことなどを |
| 5 | 6 | 12 | 学習者がこのアクセントを生成するとき | 学習者がこのアクセントを産出するとき |
| 6 | 6 | 13 | なぜそれぞれの特徴が | なぜそれぞれの特徴を |
| 7 | 8 | 27 | 推測、隔日、独裁、水滴、隔日 | 推測、確実、独裁、水滴、隔日 |
| 8 | 12 | 9 | 単語の数を増やした、 | 単語の数を増やした。 |
| 9 | 13 | 8 | 二重母音のもの | 連母音のもの |
| 10 | 14 | 1 | 図1 「問題にならない」単語 | 図1 正答率が高い単語 |
| 11 | 19 | 24 | 正しく発音するした | 正しく発音した |
| 12 | 25 | 12 | 本調査ではあまり見られなかった | 本調査では全く見られなかった |
| 13 | 27 | 11 | 学習者のほうが多かった | 学習者しかいなかった |
| 14 | 30 | 4 | まだ明らかにしていない | まだ明らかになっていない |
| 15 | 30 | 10 | 関する知識まだ | 関する知識がまだ |
| 16 | 24 | 1 | 「頭高型」で発音するできる | 「頭高型」で発音できる |
| 17 | 43 | 9 | 学習者の数が多いく | 学習者の数が多い |
| 18 | 47 | 12 | 学習者の数が多いとみられる。 | 学習者の数が多い。 |
| 19 | 49 | 28 | 母語話者から聞くと | 母語話者が聞くと |
| 20 | 50 | 7 | れるた。 | れた。 |
| 21 | 50 | 24 | 今回用いた単語の数は少な | 今回用いた単語の数が少な |